

續詩公部類 六



須賀通  
舍之章

續奇合部類卷之二十四

仙洞詩合

乾元二年四月廿九日  
五十番

吉野弘隆藏書

續奇

唐書

題

春風

夏雨

秋露

冬雪

卷之

作者

元

女房

前權中納言平羽臣經親

後二位藤原羽臣急行

散位藤原朝臣為相

右近衛權中將藤原朝臣俊兼

從一位藤原朝臣 教良女

藤大納言典侍

延政門院新大納言

永福門院小共衛督

永福門院中將

右

前中納言藤原朝臣為兼

左近衛權中將藤原朝臣家規

永福門院內侍

右近衛權中將藤原朝臣範春

新宰相

前權大納言藤原朝臣家雅

入道前太政大臣

從三位源親子

前權中納言藤原朝臣俊光

九條左大臣女

講師

讀師

判者

衆議

隱作者各被判之  
前中約言為兼卿

後日書判詞

一番春風

丸膳

女房

あすやいかにあれるわもあふの  
夕乃花よ凡しらぬを

右

前權中約言藤原相室為兼

さういふ心梅やさうられあふ  
をさるうさじつ二月

さういふ心梅やさうられあふ  
被作下冷似有感氣未及言于時  
自未座下申所為之由有るは

一番凡一被賞之由安方有申之御  
杉山保安詞苑及在可為勝之由中作  
多

二番

九折

前權中納言藤原源親

うをりふれもゆりま日ハまうくしと  
うすめりやうにうせりとのしんけい

右

左近衛權中將藤原綱家親

ふとふらぬふまうてあささゆらふ  
あしと死れぬさけうんけり

凡あしけあらしぬあやゆらん

右七つふあしあわらあそて

すめ折うし定られゆりあそ

三番

九折

從二位藤原朝臣兼行

うすらりり霞てまゆふとみれうと  
りうさぬ絶ふすくゆらうと

右

永福門院門侍

りりしけり庭れさくさあきたて  
あはし口せうま乃ゆあそ

為相御旨申云右方先年為魚舟中  
三浦社十是小舟十是此名と原と云  
小一ととりとらね下陰とよみては  
舟小似作舟くわ海小面敷うまはは  
あふた小舟作て心丸お務

四番

丸

散位者系御旨為相

ささめいふれささされ後とよみ  
のとうふさささきさう死れと也

右勝

右近衛権中将系御旨春

明とさささささささささささ  
行乃さささささささささささ

右方むりり丸ささささささ  
ささささささささささささ  
申之ささささささささささ  
けりうハ殊不すあさ結心而右は  
凡情ささささささささささ  
傍

五番

丸

右近衛権中将系御旨

麗し空花のあまをよにやまわれく  
を七のときけさるは成るし

右

新宰相

わとりはよさそひりそぬえらるあ  
花あけうらゆあられれつ路  
是れをんぬるまて花れ指の凡  
七のときけさるは成るし  
作まこところりさるは成るし  
世はまゆらまわちもらあうらふ  
はみくわらうらふこれとあまわらうと

あまの作まわらうとさるは成るし

六番

凡

後二位右京朝臣教良女

言はふ家系はさるは成るし  
柳ふらうらうとさるは成るし

右借

前権大納言藤原朝臣家雅

凡雅

しなまのさるは成るし

玉れ言はうらうとさるは成るし

左言はうらうとさるは成るし

てたり奇合ふ八下憚死は由也

相羽長申之仍以右為勝

七番

九勝

藤大納言典侍

梢よりよこきりこれよこきり  
しりこきりよこきりよこきり

右

入道宗右衛門

よこきりよこきりよこきりよこきり  
よこきりよこきりよこきりよこきり  
よこきりよこきりよこきりよこきり  
よこきりよこきりよこきりよこきり  
よこきりよこきりよこきりよこきり  
よこきりよこきりよこきりよこきり

八番

九勝

近政の後新大納言

よこきりよこきりよこきりよこきり  
よこきりよこきりよこきりよこきり  
よこきりよこきりよこきりよこきり  
よこきりよこきりよこきりよこきり  
よこきりよこきりよこきりよこきり  
よこきりよこきりよこきりよこきり

右

後三位源親子

よこきりよこきりよこきりよこきり  
よこきりよこきりよこきりよこきり  
よこきりよこきりよこきりよこきり  
よこきりよこきりよこきりよこきり  
よこきりよこきりよこきりよこきり  
よこきりよこきりよこきりよこきり



長のなまじりけいそとそしめとひら

右守ふあうさ西ふまゆり

中ゆりかこさゆりれといつらに

まよりさゆりかこさゆりれといつらに

ゆに文

九番

凡指

永福門院少云書

縁あさる花の柳よりあはれ

長うそなまじりけいそとそしめとひら

右

永福門院少云書

さそひくは花の白七のとりあて

あふゆりさこさゆりれといつらに

あそよりさゆりかこさゆりれといつらに

十番

凡指

永福門院中約

よも山あそゆりさこさゆりれといつらに

柳あすさゆりかこさゆりれといつらに

右

九條尼を指す

あそゆりさこさゆりれといつらに

柳あすさゆりかこさゆりれといつらに

たふれ柳風こころはあはれしく  
なりゆくをのくしとしかた

十一番 菱雨

丸膳

女房

みちのこよ庭れ程れりりきり  
み言すくし比のふれぬ

右

為意也

秋りこぞ世系れ事のゆあけふ  
ひさめゆりてるをそつりき

庭のあふれあさうととらあう

こつとくわゆるんとくゆと  
すつて始末れ白とようひか  
ううとをれくしてわ務

十二番

丸膳

従親

<sup>凡雅</sup>あつらふ程りあつとやとれて  
形りあわゆるふのこふたす

右

家親

ひらぬれもこのさそふとこれ  
とあれこわらあはれすふ

新瑞少あらぬわらうしむいぬまは  
仰したとれ白當しけあうし  
若くして縁ゆりあさ

十三番

尾抄

巻終り

所多御らのむさやふしあすまで  
行とおありつゆされあえ

志

口行

片墨れなうれあ陰ふたらうら  
夕乃らまうすくられさひん

明るれあうしむいぬまは  
とらみまうしむいぬまは  
さみまうしむいぬまは  
かこさうしむいぬまは

十四番

尾

為相朝臣

晴やらぬ日敷いぬまはあは  
あまやさ月とげりうらん

志

範春朝臣

あまやさ月とげりうらん

多のくすくすこハみりもさし  
凡れくまにはまえゆらとちんた  
ら海くして秀逸乃所之様つあ  
勝之由名戸ゆりさ

十五番

凡勝

後急相尾

病ありしとてしこれあを急りて  
あ光ふまらうさり又言の趣

右

新宰相

初めふありうそいけりさうられ

さしこ言ハ様おめえり

あ紫れ竹とくもそ秋う出

しつりよふ寸やゆんささて

しゆしつたわ箱

十六番

凡勝

後一役者系羽尾也

次しそ紙ありしとてしうゆすられ

名跡う名跡れ趣乃あし

右

家雅以

山乃うそこの趣あしつし

あはれなるに若くは月あはれを  
あましくすうは月あはれを  
はるあましく若くは月あはれを  
しそ中さうは月あはれを

十七番

凡

友方納之典信

うらやみそ萩の若葉に落きさみ  
あはれあさけれをそとさうし

右信

入道左政右信

あはれなるに若くは月あはれを

みせりしうすそあやゆりし

あはれなるに若くは月あはれを

あはれなるに若くは月あはれを

あはれなるに若くは月あはれを

あはれなるに若くは月あはれを

右信

十八番

凡

新左衛門

卯月うふ日殺乃社りしりそりそ  
こわむ月あはれをそりそりそりそ

右衛

後三位親家

枝より起りては行を越おし  
取こまらるる門の中ありて

九印有うおひかるといふも

面りなり物にこれ能れり

取あるにわく右所具ふ

てたうくすめて能申る

十九番

九番

少佐信曾

一とよりわくすまわら

名所のそにいなは戸のしけ

右

後光卿

けりあめらるるやうり

みよりとていふとれ

名所のそふりあつ

くまゆりてとれ

ゆり

廿番

九番

中将

そまゆりたるるれ



られゆふき

廿二番

九物

絶親口

な〜う〜に〜る〜落〜は〜ま〜た〜  
成久此桐乃ちう〜さ〜中〜あ〜れ

石

家親御屋

あ〜れ〜ま〜し〜い〜り〜あ〜さ〜あ〜ま〜乃  
落ふなるしり結れま〜し〜

な〜う〜あ〜え〜れ〜落〜れ〜ど〜き〜ら〜あ〜い  
父の意もう〜く〜ま〜ゆ〜さ〜孤〜人

うきり〜し〜し〜い〜落〜れ〜ま〜い〜えん  
事ねあ〜り〜う〜ま〜い〜り〜ド〜ん〜く〜ゆ〜さ  
細明の意もなるしり〜し〜り〜あ〜ん  
あ〜う〜あ〜あ〜り〜し〜し〜お〜ふ〜色〜ゆ〜ら〜あ

廿三番

九

魚釣口

あ〜り〜み〜ん〜ま〜し〜ら〜れ〜ま〜れ〜ま〜い〜は〜え  
海〜凡〜乃〜ぬ〜萩〜乃〜あ〜い〜は〜ゆ

右傷

内傷

身〜し〜ふ〜あ〜け〜れ〜ま〜う〜れ〜う〜ゆ〜さ〜ら



夕種ふあまう露れいりうれ  
ありうみん死もよの月うあといか  
ましそまゆらと下の山製に無何也  
各う作てふ名爲橋

廿四番

凡作

爲相羽片

秋いしうて東の露もそそにさ  
月のやとり死うたうのさそ  
右 範春羽片

音うと死羽うもくれさこれうぬ

かさこもこも露のふそこさうけこ

凡作いひありてふいしうたうて  
たあこもしたらこにうてこたを  
かてれさゆこもにたあさう  
各うてく爲作

女わあ

凡

後急羽片

名深うあそれ露れゆく活あり  
秋とあまにうてそそこ

右橋

新寧相

と記さすは落し光と月れい  
のくふぬら所あさらふれあえ

申くぬらとりつら初とこく  
わぬさぬらうく各中りとうふ  
あさらふのを結るさうくや

廿六番

九拾

流一住最系初下母

敷とかられ野分の記ハあぬさ  
系れえあうさほゆのあさあけ

志

家新也

死ハまこ候七とあぬとを記くえ  
落のそ祐とと記すはらん

た右とりにそて籠中事く由名  
て系れあうささ落の初あけ  
初う結くささして結初りさ

廿七番

九拾

友と初と典侍

あさうらりあ初明くう凡の  
と記あぬ落れとれとそらう

志

入道あさ最系

秋のさる草のまにわらぬをてけうゆ  
我をさるをけいひをわけり

あ育有之種之正各為宜奇之  
一曰中之為物

女八番

凡物

新右衛門

ひりぬれおとねるゝぬあさうせう  
草葉之ふれてお路をわらふ

右

後三位親家

秋の色こまゝにわたぬあさうせいの

草の葉をけりてお路にわらふ

草葉一にさるゝお路にわらふ

名も露をわらふもよもはなれな

とれこゝろひとあつていかなるお

うてさるゝわらふ

女九番

凡

小右衛門

日くりすじなふみゝりうけのあ  
あさるゝ後とわらふ

右

後光

りれりしやいふぬさるりそるる  
草もも枯れみくらふのつら  
んつらむむとれとてさやうら  
しははゆりしうと右のあつと海は  
いす晴之由之をいゆりま

亦番

凡作

中将

うす雪のつらく朔けの危えれり  
るふあまわらる枯のえりほめ

石

九條元官也

<sup>凡雅</sup>あゆれすす枝吹之す秋風り  
己ゆりすあつる藤れうん此落

うすきりりうらうらあさけり葉み  
あまわらるるみうらうらうら  
何と枝吹之す秋う藤にうゆめ  
あふも又とてかてとておあさ  
ゆりま

亦一番 冬雲

凡作

女房

ふあうりれ枝の葉ふらうらあははの

しり〜な〜り〜きれ〜り〜あ〜

右

多急郷

三〇の音しり〜り〜き〜にき〜ほ〜を  
こ〜ほ〜風〜あ〜り〜こ〜り〜さ〜れ〜り〜  
あ〜り〜り〜り〜あ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜  
可謂者選〜こ〜ゆ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜  
杉歌〜あ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜  
負〜ゆ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜  
あ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜  
と〜り〜り〜

亦二番

九折

短親口

月あ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜  
り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜

石

家親御信

と〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜  
と〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜  
と〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜

亦三番

九折

あ〜り〜り〜り〜

まゝの心算をわくせはなほなほ  
あつふふの海家くもあつらふ

右

心算

まゝの心算をわくせはなほなほ  
あつふふの海家くもあつらふ

各り之

可回番

凡右

右相細片

あつふふの海家くもあつらふ

あつふふの海家くもあつらふ

右

靴長細下

あつふふの海家くもあつらふ

あつふふの海家くもあつらふ

あつふふの海家くもあつらふ

あつふふの海家くもあつらふ

右

凡右

後魚細片

あつふふの海家くもあつらふ

何くくえらり〜

右

新宰相

をうこにきふきみいり〜

あそきよき殊事〜

一曰申之

可六番

さお

後一位後原相臣女

一村の志られのを〜

右

象雅也

凡雅記〜

りり〜

可七番

ん

後元相之典行

あり〜

右傍

入道前を段を旨

玉京  
夕日るしつらひのぬきくればのしつらひ  
みららぬ心むきぬきけり  
ききききききききききききききききき  
ききききききききききききききききき  
ききききききききききききききききき  
ききききききききききききききききき  
ききききききききききききききききき

亦八番

凡

新らねと

言あつてしつらひのぬきくればのしつらひ  
雲はるしつらひのぬきくればのしつらひ

凡右橋

後三位親子

星乃しつらひのぬきくればのしつらひ  
あつてしつらひのぬきくればのしつらひ  
ききききききききききききききききき  
ききききききききききききききききき  
ききききききききききききききききき

中

亦九番

凡

小

言あつてしつらひのぬきくればのしつらひ  
雲はるしつらひのぬきくればのしつらひ



右

俊光

けぬめの雪ふりて  
ゆきふりて雪ふりて  
ゆきふりて雪ふりて  
ゆきふりて雪ふりて  
ゆきふりて雪ふりて

四十番

左衛門

中将

風の音乃をけりて  
風の音乃をけりて  
風の音乃をけりて  
風の音乃をけりて  
風の音乃をけりて

右

九条左大臣

凡ゆぬ雪をけりて  
凡ゆぬ雪をけりて  
凡ゆぬ雪をけりて  
凡ゆぬ雪をけりて  
凡ゆぬ雪をけりて

勝てよき各うき  
勝てよき各うき  
勝てよき各うき  
勝てよき各うき  
勝てよき各うき

四十一番

左衛門

右衛門

多しき物はん  
多しき物はん  
多しき物はん  
多しき物はん  
多しき物はん

右

鳥居

言毎くうらふと満ちるまじり  
うらふまされうらふいふは

凡傳習をしを為考守う一日  
申之者とてさしこころを人  
くゆりかきそ那及ううと

四十二番

凡

経親郷

さすうをくうらふいつとこれ  
そりきり記と減ふと

右務

家親親信

はくくうらめてありふあされれ  
そりたせありれと

各やて為務

四十三番

左

急行

今とてゆゆふいありとゆふあり  
まらしたのそりゆり

右務

内務

ゆりゆりとのそりてあり

はるかにわくわくしやうとてわくわくのうた

九所製ふくふくすゆきゆきとて人こゝろ  
うたふくふくすゆきゆきとてゆきゆき  
ゆきゆき

四十四番

九

為相羽伝

あつれこゝろゆきゆきとてあつれこゝろ  
ゆきゆきとてあつれこゝろゆきゆき

右伝

範音羽下

ゆきゆきとてあつれこゝろゆきゆき

あつれこゝろゆきゆきとてあつれこゝろ

ゆきゆきとてあつれこゝろゆきゆき  
あつれこゝろゆきゆきとてあつれこゝろ  
ゆきゆき

四十五番

九

後為相羽伝

あつれこゝろゆきゆきとてあつれこゝろ  
ゆきゆきとてあつれこゝろゆきゆき

右伝

範音羽

あつれこゝろゆきゆきとてあつれこゝろ

あつちのうらたてりたれのかき  
んんあつちのうらたてりたれのかき  
とちのうらたてりたれのかき  
るまのうらたてりたれのかき  
物つとてうらたてりたれのかき

四丁六番

尾勝

後二位後系下廿

いくりたまあつちのうらたてりたれのかき  
はれそれあつちのうらたてりたれのかき  
ち  
家雅

あつちのうらたてりたれのかき  
とちのうらたてりたれのかき  
るまのうらたてりたれのかき  
物つとてうらたてりたれのかき  
とちのうらたてりたれのかき  
るまのうらたてりたれのかき  
物つとてうらたてりたれのかき

四十七番

尾勝

後二位系下廿

いくりたまあつちのうらたてりたれのかき  
はれそれあつちのうらたてりたれのかき  
ち  
家雅

右 今何事を致す

つゝも小物りやを御しにけりり此  
う紀にるゝとぬみへなりと  
右ちちりりくまゝ物りとちりぬ  
而新のちりぬくやと人か  
やありしうたむ後あか  
くゆりりしゆらなるとまゝ物

卅八番

右

新右衛門

今にまゝを御しにけりり此

物をしにけりり此

右 後三位親子

今にまゝを御しにけりり此

今にまゝを御しにけりり此  
今にまゝを御しにけりり此  
今にまゝを御しにけりり此  
今にまゝを御しにけりり此  
今にまゝを御しにけりり此  
今にまゝを御しにけりり此  
今にまゝを御しにけりり此  
今にまゝを御しにけりり此  
今にまゝを御しにけりり此  
今にまゝを御しにけりり此

卅九番

左勝

小名高摺

一ふにこいふよすしなれやうらうらえ  
こいこいこいこいこいこいこいこいこい

右

後光郷

今こころふまにあけくらんいつもえ  
りしうらうらわしきくれのこころ  
たよりしくまゆらうくやゆ  
うた恵れんを念ふまゆらう  
各やしてをん徳くさうくをえ  
ゆりう

五十番

左勝

中将

娘しこもつこもわいああおん  
物取ふじうあくれのこころ

右

九條左大臣

いさむけりらつらうらうら  
くれけりらつらうらうら  
右七凡格  
ししゆれしたれらうらうら  
ししゆらうらうら

一日中月夜

*[Faint, illegible handwritten text in cursive script, likely bleed-through from the reverse side of the page.]*

漢新合教新卷之二十五

三十番新合

乾元二年五月冒



題

夏夜

絕德

夏松

作者

元

女房

前大納言家雅

右中將公範春

前中納言俊光

元中將家親

右中將俊兼

九条元大臣女

前大納言教良女

少兵衛侍

中将

右

左

藤大納言富待

前中納言為重

前左部卿兼行

永福山院内侍

新宰相

前中納言經親

前右兵衛督為相

延政山院大納言

春宮権亮清雅

後三位親子

講師

三下頼師

三下頼師

判者 三下 為相親臣

一番 夏夜

九條

女房

あきおるうつくしきふゆさけあゆみのとよ

まろくはらふとふとふとふとふとふとふと

右

藤大納言典侍

まろくはらふとふとふとふとふとふとふと

まろくはらふとふとふとふとふとふとふと

たふたふたふとふとふとふとふとふとふと

たふたふたふとふとふとふとふとふとふと

たふたふたふとふとふとふとふとふとふと



糸と氣は海より比して襪よ  
ゆきしとたるとふりつる  
さゆり一各定中早

二番

左衛

範春朔后

草ぬくは籠の露より月とみす  
あき乃をきよておるゆ。

右

新中納言為重

月影はまよふもあはれ  
るしとふあはれはあはれなり

右文新とぬるめしと巻乃

いととくに宜くまよつとゆると

たそ羅る露よ月とて

すよめ林の中を新しとゆ

徑はりぬは類由定中ゆ身

三番

左衛

新大納言家雅

凡ふをよとくまよとて

雲よりぬくは月あふり

右

前左衛門兼行

新きふ却月とてしつゝのあまきふれ  
よのめふくは方しつゝもねし

九尋雲ぬくくく三句。しつゝ  
む雨木風うそくはあつと云  
しつゝるしつゝくはしつゝ  
風雨しつゝるあつと云しつゝ  
深ふ能くあつと云しつゝ  
とつゝしつゝくはしつゝ  
つあつと云しつゝ三句と  
しつゝあつと云しつゝ被作也

猶以九為晴

四番

九為

前仲納言後光

しつゝらつと云しつゝくはしつゝ  
しつゝらつと云しつゝくはしつゝ

右

采後門院内侍

ほしつゝきつゝいしつゝりやなつと云しつゝ  
あましつゝくはしつゝあつと云しつゝ  
た尋しつゝ珠難右又有其心可也  
物しつゝ由後定

入妻

九

家親朝臣

おのゝとあまのつらぬけはゆり  
くさくさくさくさくさくさくさく

右孫

新宰相

おのゝとあまのつらぬけはゆり  
おのゝとあまのつらぬけはゆり

右孫 有同歌とくさくさくさく

おのゝとあまのつらぬけはゆり

年

大妻

後美朝臣

大妻

おのゝとあまのつらぬけはゆり

おのゝとあまのつらぬけはゆり

おのゝとあまのつらぬけはゆり

右孫

新中納言

おのゝとあまのつらぬけはゆり

おのゝとあまのつらぬけはゆり

おのゝとあまのつらぬけはゆり

おのゝとあまのつらぬけはゆり

おのゝとあまのつらぬけはゆり

不廣居申時  
有難以右為勝

七番  
九条元大長女

風よりひく折のあやめれ新をひて  
神木深しきよひ乃中一の月

右勝 為相物居

多けくうる言しき深しき風きて  
神くくくしれ情寝入り申中こ

右ハ初白并三白しわ西行

詞可力難  
石石不勝し中後定其神性息  
非可勝外

八番  
新大納言教良女

まじしれ露入光とまきくりて  
あまの深しき友れ乃月

大 延政内院新大納言

さ月しはあふくみよる  
るまゆくはあふくみよる

有しとれ子とわく物とを  
るまじく乃露八誠よ光あつて  
よ物きく可勝く下定中平

九

た

少兵部

下まきやれあふまきよや中よ時鳥

心とくあふむ物あすめらうと

衣

法雅

まゝれつる月八折端よ新と

あゝ鶏とさびるる名とさひ

下た石と向傳方難走く也各申く

十番

石

中将

月とふたあまよの申るあけよ  
夢の影を折りてりゆせん

衣

頃之位

みしつゝま物糸あふみる月

ふひとあふよのひのまことゆ

たす心刺傷養ふと物終る

とたふ物とけあき世の中満

申く石又の心志を興あはるる後  
不始也とともた猶驚くはるきは  
可有勝る中定はる多

十一番 絶悪

たね

中将

れりし子しりのゆへ勝るはるる  
あはれよなるてしひもはる

右

後三位親子

うらやまあひやよさむ一人  
たね一我身とほくはあはる

たねまうしに新よあはる  
柳あはつらあふあやゆしむた  
るむぬくてあはるしあはる  
名中命為勝

十二番

たね

少将

あはるしに子とせよしひてあはる  
しひらまきしとあはる人の心

右

清雅朝臣

あはるてあはる我命とせ恨あはる

ありのうらぐれ果てしとありとも

あ首雖実一交相同く世用

やと

十三番

たけ

教良の女

翠とくく世のあはれあるりては

けらゆ我身といふ木やうん

石

新大納言

うらぐれあはれあはれくおけりて

さひらりもあつてそけりて

たそ巧なるやうよはゆくと

のころ我身とくたはれく

ころるむらうくゆくと

たの物

十四番

た

九条元大信女

あはれあはれよのころあはれ

あはれあはれよのころあはれ

石

為相助長

あはれあはれよのころあはれ

そりくみあしおねし

た奇世のしんりや

ふはあしゆふしよゆあ

右奇勝字つきれゆ

十五番

九番

後蓋羽片

うしうしあわれとせ

只ひりしと出し

右

経親婦

西教入を

えりき首しんり

右奇人のあれ

きゆ経い

より衣申

多しゆま

うしゆ

十番

左

家親羽片

たう根人入

あられしゆ



右 新宰相

其のすゝめあはれ意知ぬらふらふ  
しほのしほのしほのしほのしほのしほ

中三句なきよあしと東の  
ふらふらふらふらふらふらふらふ

きりしけり氣文ありし  
次右為勝

十七歳  
たむ 俊光卿

けりしとあはれぬらふらふらふらふらふ

人なり 聖子とれふらふらふらふ

右 内侍

けりしとあはれぬらふらふらふらふらふ  
あはれしといまはとてしとてしとてし

十八番  
たむ 家雅卿

けりしとあはれぬらふらふらふらふらふ  
雲風とていしとていしとていしとていし

けりしとあはれぬらふらふらふらふらふ  
雲風とていしとていしとていしとていし

右

蕙行綿

中よりすゝめりしものありけりしもの  
わすれしきりぬりしものありしもの  
是又しりれしものありしものありしもの  
ふり勝負なきや各々しりしものありしもの  
十九番

右

蕙春羽伝

おしりのすゝめりしものありしものありしもの  
ふりしものありしものありしものありしもの  
右 為兼郷

おしりのすゝめりしものありしものありしもの  
ふりしものありしものありしものありしもの  
右文心ありしものありしものありしもの  
ふりしものありしものありしものありしもの  
又写ししものありしものありしものありしもの  
とけしものありしものありしものありしもの  
藤原羽伝類ありしものありしものありしもの  
ふりしものありしものありしものありしもの

二十番

右

女房

くまひくしてあまのこころを  
らひてきこれずしめさくく

古 女房 大納言曲侍

さあてこころいましてひのけあて  
いそつとほまらうくみと

た寄古来まう文あゝあま

こ也あゝくひとあゝよな

たまあゝあゝくくやゆん

と肝又銘て是北とくくを

くくゆくゆくくくくくく

勝のより有脚氣あお

ゆくくくく

廿一番 度松

女房

申あくれえね。あま山。あま

行くくくく

古 女房 大納言曲侍

あまあま行くくく

申あまあまあまあま

行瑞くくく村あゝあゝ何

のうへに... 常氣... 枝作...  
ておよ... ぬ... ぬ...  
其二番

たね 範五郎

あめの... 松... 右

右 為兼

と... 表... 枝

た... 右... 枝

と... 右... 枝

と... 右... 枝

サニ番

たね 家雅

と... 右... 枝

名

兼行卿

折らぬ花もよそよそふゆのまは  
 くらぬ時あはれをさうり  
 古文宜き入相つくと  
 不れらるるたふま  
 約んち約んちとぬ  
 羅ふあはれ石又ふあはれ  
 八ふらふたふらふたふらふ  
 定中平

廿四番

名

俊光卿

雨ふれぬ指のやま雲らて  
 山ふらふらふらふらふらふ  
 名  
 女さるくく山のあはれ  
 折瑞又さうりくたふれ  
 古文可き珠半燈用て  
 初を満耳て不庶  
 有其少石  
 とし約又さうり

雖中々可為勝被定

サの番

たの

家親羽伝

表すめハ物といく世の宿れ之庭ハ  
本之ぬらぬ所たより一り也

右

新宰相

きくこひ思ゆらんしりしきと山里り  
行瑞よ包く松風たふさる

而た文又所製中よ其下句有

同類の也雖之少は例 税言被

成物なり

サの番

たの

後兼物伝

さしつゝの包うとすれはうにり季  
かろし行くれまらぬのひとめ也

右

経親ハ

近々そと地あるさしりくすじ着る  
行よこ高まて松をぬくぬ所

包う友中約心強きと要し他

各中々右寄約句前中納言

西詠也 雜記之也 中々々々

無勝負

サ七中

たの

九条元正女

遠く西の一本の松 秋風ゆく風も

いく村の女は 心をきくらん

右

為相朝臣

ゆつとゆつと 心ゆく 心ゆく 心ゆく

行くよふよふ ぬるる 松の枝

右文心くじ 心ゆく 心ゆく 心ゆく

らんちゅう 心ゆく 心ゆく 心ゆく

太奇例 祝言 心ゆく 心ゆく 心ゆく

ゆきを 心ゆく 心ゆく 心ゆく

心ゆく

サ八番

たの

教良卿女

庭の西の松 心ゆく 心ゆく 心ゆく

梢のまじり 心ゆく 心ゆく 心ゆく

衣

新大納言

ほろろ 心ゆく 心ゆく 心ゆく

松へけりき庭の夕ぐれ

あつたて為物

九番

尾

少長房

庭はもろく連入日新の漢もろく

これいふけりや折の松の枝

右勝

清雅羽伝

此松らるき松よありハ吹くれあ

入桐ひく宿とふひく

木れく整きく又折の

松の枝と竹ほくあや木く下

を松のまに柳不ふ明

く中有何は石奇勝平

三十番

尾

中将

いふまゝあそく世う青くひく松

松ゆきけり家下くま庭

衣

後三佐親子

まゝいひ松折くく松と竹と庭



為りしこりぬ入相入  
左寄ハあくられいくふのやと  
かんと得たき命れ而新と  
予他とひあけりしはく  
出まきしはくし  
あらしむいこあひる  
ふらひしはくし  
記ししはくし  
系明はくし

千時乾元二年六月書字平

後為兼判

右二寄合者前中納言後原為兼之  
以正跡中令書字則付授合平

元和三年九月日羽林某判

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

續歌合部類卷之二十六

関白家誦合 貞治五年十二月九日

題

年中行事

作者 次序不同

後普光園 主人二条関白良基云

内大臣 二条殿御息所良公

前大納言 今少路良冬之口  
良基主公伯父

入道大納言 松原忠隆之口  
法名觀意

二位中将 善成之口江官

部一頁一

部二頁一

部三頁一

部四頁一

勝四持五頁一

勝一持四頁一

勝一持三頁一

勝二持二頁一

勝三持二頁一



新中御言 冷泉為秀心

勝二持三頁二

忠賴羽臣 鷹司中將

持二頁一

殿中將 所副羽臣  
二余父沙息

勝一持一頁一

家尹羽臣 月輪

持二頁一

大藏卿 坊城長德心

勝一持一頁二

秀長羽臣 菅少御之

持二頁一

為知羽臣 公宗左中將  
秀秀之子

勝二持三頁一

宗時羽臣 兵庫以  
兵部右衛門

勝二持一頁一

嗣長羽臣 中務大卿

負二

守長 丹波守醫官

持一頁一

兼照 縫殿式吉田神主

勝一頁一

頓兼 春宮亮  
細依寺入左

持二

頓阿 俗名未尋

勝二持三頁一

徑賢僧都 弘明子攝察傍拉

勝一持二頁一

宗信法眼 羽測法眼

勝一頁二

貞世 今川伊子守

勝四持二頁一

蘆隆 或友持込入左

持二頁二

僧宗久統業僧

勝一持三

作者女三人

判者

新中御言為秀卿 加衆談判討

詞

如房書之 圓白良基公

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 詞, 如房, and 圓白.]*

圓白家詩合

一番

元四方拜 二月一日

如房持

まろき此是代とてるやうなる人  
光少(ひかり)きまほはよふも糸  
右(みぎ)供(たて)看(み)蘊(うん)白(はく)散(さん) 日(ひ)

新中御言

まろき此是代とてるやうなる人  
光少(ひかり)きまほはよふも糸  
右(みぎ)供(たて)看(み)蘊(うん)白(はく)散(さん) 日(ひ)

別者新中御言藤原朝臣為秀中云た奇  
早きことかみをとて光乃がうけりてつうのう  
き優美よりうへ所の新合の例よ向るもく  
はゆよりまきうしりまきとあともあかにまえつ  
ふんとゆきも幽玄に討たり人歎めしとあ  
すうし人しゆにうり持し所くまうゆき  
抑詠奇此道を周楚りきまきゆきあま  
えうとに深淵此まきまきううともゆきま  
一書りともて依保川乃うしこま流まきうりて和  
山秀此神の人かきまきまきううしりてゆきま

かうし言うる花をよみ流月電と詠まふ  
うひうひのれまきあきゆきまき月あかり  
三をげくるあまきくのねかやけしとあま  
南殿のまき花まきまき人いさみ溝の秋  
め紫まきまきあきまきまきまきまき  
よりまきまきまきまきまきまきまき  
はまきまきまきまきまきまきまきまき  
につきて詞まきまきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまきまきまきまき  
のれ又子のまきまきまきまきまきまき

つぐいぬ事三けき政者これ礼義なりとて  
行まハ判乃初此るくふふの類とて  
て公務の事しすしとてあし皇蒙のま  
ふいともいふふは内なるぬをのこり  
さしといふさうとてふしゆかきし  
拜といふさうのちふのち代四方とていふさう  
とゆふやえとて言乃けしとてしゆの属を  
とてふ人あらはれり四方山陵と拜強く年  
とてとてしゆの事とて初とてさうとてしゆ  
るふの事とてしゆの事とてしゆの事とて寛平

二年此より西門乃記我らとてしゆとて監  
觴とてしゆとて皇極天皇とて初とてしゆ  
四方と拜しゆとてしゆとてしゆとてしゆ  
とてしゆとてしゆとてしゆとてしゆとてしゆ  
表仙洞折政園白とてしゆとてしゆとてしゆ  
とてしゆとてしゆとてしゆとてしゆとてしゆ  
年皇本命皇とてしゆとてしゆとてしゆとてしゆ  
とてしゆとてしゆとてしゆとてしゆとてしゆ

右屠蘇白散と云くは一人のまじりぬ一  
家も病なし一家のまじりぬ一里に病なし  
と云くは切絶ゆるまじり年比ししりふ  
清涼久しきまじりゆきまじりふ  
童女とてゆきまじり屠蘇白散小児ゆきまじり  
本文ぬきぬきまじりふまじりまじり  
りまじりまじりまじりまじりまじり  
屠蘇白散乃本弘仁年中まじりまじり  
此ぬきまじりまじりまじりまじり  
まじりまじりまじりまじりまじり

蘇酒入くまじりまじりまじり  
入く配膳まじりまじりまじり  
二日ハ五位ニリハ五位病入乃後まじり  
一猪明白散と云くは三献ニ度障散を  
供と異卵乃まじりまじりまじり  
屠蘇酒昔人屠蘇菴除久遺里人まじり  
衾浸井中元日取氷置酒持名屠蘇飲  
定不疲

二巻

小胡拜元日

天子はまことかきとそしめ

御事御事とまこととそしめ

右御事

前大御言

雲北上のまこととあせし

年一なりしりれり代り

新中御言申云た方いさ

くもれととりてま

右壽御言は万歳とそしめ

つたうをいぬりしき

くぬしゆまこい

かりき

いた方北のまことと

惟皇とそしめ

のためあまぬく

給ふ火あつたけ

そしてえりし

中よりしてと

て朝廷はまこと



あゝも是はいしうに此紀也天子の私とし  
とふ文ありしは海しつらりしものなりし  
是等の言は此海門勅ありし是花のゆゑに  
りすと雖ひいしうにありしは海門に  
えぶの良しなりしは海門にありしは  
P 後一六日ぬのふまゝなりしは海門に  
ふれゆりて今ハ年止りの事にはありし  
ふしと雖もよきふしゆかりしは海門に  
其今序なりしは海門にありしは海門に  
かゆえゆりしは海門にありしは海門に

下此まゝしきとたりしをそまりの言は  
清涼殿の座は是位を位を神とつは  
年譜をみるに印の別の事なりしは  
上しうに海門にありしは海門に  
てんて程作まるとしと養ししは海門に  
お序ありしは海門にありしは海門に  
P ありしは海門にありしは海門に  
しは海門にありしは海門に  
右ハ羽撃をみるにありしは海門に  
心養ししは海門にありしは海門に

こしとほして今日おさしとて是と奉るとも  
もハ奏賀奉瑞とて二人座よりすこし後を  
中やと候式ハ右様殿のまゝとてははるは  
ぬ人ハ礼服と看てさるゝ御中位此とて  
今方代乃びまゝの御いさゝとてしつて二方威と  
とをぬり申せりといひしはさき方々ふと方  
威とともぬりといひしは延嘉とていふは  
申ぬりまゝハ二方威のまゝとて相候此のま  
まもぬりまゝとていふは延嘉とていふは  
院正暦年仲よりけりぬりまゝとて神代天

皇元年正月一日かして京乃まゝとて  
てけしとて位ははるは延嘉とていふは  
摩正暦年仲よりけりぬりまゝとて神代天  
んえうり

三番

水様 ヒシタ えり

入道大御言

まゝとていふとてハまゝのまゝとて御の  
氷比のぬりまゝとていふは延嘉とていふは

右 腹赤御懸 ハラカノミ 日

二位中将 胸

とりまけお世なりをありしめを渡し  
はきかきしうも沢まうと此うめ

判者申云たあふまぬる雅きく物も  
うしと野のまやういさうかたりや  
たれお世のをありしうはぬつをさぬ  
ふしとあのみきまうありしと便よゆきか  
と物とし申にあしにまもるる胸はんと  
定しき水様と一ハまの此水とわさめり  
あめのみしとふまは合れ此水と養命の

あつさふまはくあめす法まゆりあしと  
養命の例とを氏ハ石をさしとまう  
る水池の水とこ何しと代ちつと延命  
水池系<sup>セウケン</sup>なして物もまてゆり水此かかく  
あつさ代のまうしや水乃あぬの玉年此  
しとくゆきと氷れ神祈とまは法  
こなまらしとや今りもよくこあしと  
まうしとまうしとまうしとためしと  
法祈らひの命際とんゆりやうに徳天皇  
の御方頼田大付者とまうしとまうしと

とたてまつりて勢はふと成るが如くはとよき  
とれたるやうく四つに氷室を以てしるすは  
右の如く流は系より腹赤此奥よりくもりや  
昔ハ昔は今此の如く流は系よりくもりや  
腹赤此の如く流は系よりくもりや  
うして食けりてはせきりしき杯を  
ゆり景行方身の内代流後出は長  
流は系よりくもりや  
昔ハ昔は今此の如く流は系よりくもりや  
腹赤此の如く流は系よりくもりや  
うして食けりてはせきりしき杯を  
ゆり景行方身の内代流後出は長  
流は系よりくもりや

七つとて今をまつりてはせきりしき杯を  
ゆり景行方身の内代流後出は長  
流は系よりくもりや

四香

た 條 時 客 二

忠頼那臣持

初春此屆よのあまひのたけりえと  
梅のこころふとくハサハハ  
大 花 水

お 藏 卿

春をえらむとてふとくハサハハ

ふらびらりたりやまのりりりり

た初まはたなとのあまひは梅くえはあを

中ひいりゆり優長よまきこえゆりあを

水よあまも此にけ難かきゆりりり中

細きりゆりり持りゆりりりりりり

所付容と云ハ振政風は他家よまはり

めお位以下此よまはり振てあまひゆり

のありりりりりりゆりりりりりり

隙時容とハりりりりりりりりりり

大饗八年とハりりりりりりりりりり

高野

とワりりりりりりりりりりりり

あ氏れ長者来念は現をて殺ゆりりり

の家よふ振て乃饗とゆりりりりりり

まもは比はりりりりりりりりりり

ゆりり隙時容のりりりりりりりり

て催馬系りりりりりりりりりり

右が水とハりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

至水司内表よりりりりりりりりり

きりりりりりりりりりりりりりり

こゝろや文約ややははけりやとほしく物  
らぬや

五香

た白馬節會（つらみ）（し）（ロ）（ク）（エ）や

鯉河の

松乃葉はあまのりぬりしむも

とくられりやまらるる

大視告朔

妙序

とんふと乃くときけりりぬい

むいし此あまを移るをうのん

判者新中御へ尸云た松の葉は是の子

りといふもくゆりまのまらりけりや

告朔は羊論語よりくるや和文はよき

まらしておつてゆりきりしきり

た正月七日白馬をひきつる事ハ惟もや

進ゆりるまはれはとまはるはなり

といふも馬ハ陽は敷や青ハまのりや

りして正月七日白馬をひきつる事ハ

とて年災と乃くといふや和文はよき

内まの御馬ハニセサ一モカク一是ハニモ  
手比人よりくふく一寛平乃御記ニ云  
一ノ節ニ云レ美式ハいつとの事ナキモハ  
内まの御馬

石親告朔ハリルホ一此文乃とらりと或國  
の事といさう事列ありや論後といふ  
月正と云朔ニ廟よりつるも一或朔の文ハ  
百箇めあり事の上りともして月正には  
子此に洗すりやまれし告朔の文とらんを  
りともふかたりし人かかぬの文とらん

内まの御馬ハニセサ一モカク一是ハニモ  
手比人よりくふく一寛平乃御記ニ云  
一ノ節ニ云レ美式ハいつとの事ナキモハ  
内まの御馬

白馬より命ハ云武代ハ十年正月七日

殿よれしうしゆししてらん迄の事ありしをい  
まにうん終ふこれやうしゆししてらん迄の事ありしに明  
白に此書示院よりししてらん終ふとありし若  
知も壬辰元日五年九月よりあがらうて  
若知よりしゆししてらん迄の事ありしに明  
白に此書示院よりししてらん終ふとありし若  
知も壬辰元日五年九月よりあがらうて  
若知よりしゆししてらん迄の事ありしに明  
白に此書示院よりししてらん終ふとありし若  
知も壬辰元日五年九月よりあがらうて

六香

花春日祭 二月上申日

僧宗久

かまらふ代し此秋よりしゆししてらん迄の事ありしに明  
白に此書示院よりししてらん終ふとありし若  
知も壬辰元日五年九月よりあがらうて  
若知よりしゆししてらん迄の事ありしに明  
白に此書示院よりししてらん終ふとありし若  
知も壬辰元日五年九月よりあがらうて

殿中侍師副理

初書乃法此しゆししてらん迄の事ありしに明  
白に此書示院よりししてらん終ふとありし若  
知も壬辰元日五年九月よりあがらうて  
若知よりしゆししてらん迄の事ありしに明  
白に此書示院よりししてらん終ふとありし若  
知も壬辰元日五年九月よりあがらうて



賞を賜ふに下りしに於て此は列者なり  
其の由を尋ねしに別々の事ありと云ふ  
其の乃御詔書傳へり云ふ是と云ふに  
其の事ハ神護慶雲年中にやと云ふ  
幣はありしと云ふは年中に二きしとの御詔書  
傳へり

大御女を云ふは古御殿に於て二月八日より  
十四日まで七日にありしに家勝王臣と傳へ  
らして御女と稱す云ふ事也其臣は  
其の事ハ國史に傳へしに切然ありと云ふ

何れに於て此年此始に云ふ事ハ海を以てけり  
こと昔に於て年なりと云ふ事ハ其の事ハけり  
まかり今ハ臣履を以て云ふ事ハ其の事ハけり

春日此より二月の上よりありと云ふ事ハけり  
此日御使より近來の御事傳へしに清和  
天皇貞観元年の二月の御事ハ傳へしに  
其の事ハ天皇天皇の御事ハ此の御事ハ  
ひに延月しく金光明御事ハ其の御事ハ  
其の御事ハ其の御事ハ其の御事ハ  
其の御事ハ其の御事ハ其の御事ハ  
其の御事ハ其の御事ハ其の御事ハ

常式よふやうにぬえ

七巻

大女叙位 正月八日隔年

為邦朝臣勝

是よりあつたはるしこ此をいふ

右除目 正月二日

新中細

八隅よりせしむるはしあつた

はくしよあつたはるしこ此をいふ

新中細よりいふ大女叙位よりいふ

はくしよあつたはるしこ此をいふ

はくしよあつたはるしこ此をいふ

はくしよあつたはるしこ此をいふ

はくしよあつたはるしこ此をいふ

はくしよあつたはるしこ此をいふ

はくしよあつたはるしこ此をいふ

はくしよあつたはるしこ此をいふ

はくしよあつたはるしこ此をいふ

はくしよあつたはるしこ此をいふ

らきし事たりし是の子よりしめし何  
とるしゆく三子のうちよれはまのりりあが  
中法をゆふもこのまのりり文とあしと  
女叔位よの女五位をゆふまのりり  
よりきしかれし人のことお傳しと  
のゆいしゆしきちりまのりり

右縣石除目と下外官とりのこと  
りりや外官と法圓のつとさしゆ  
田舎とあつたふしと外圓の人と  
てはゆいしゆをりりまのりりし  
とゆいしゆをりりまのりり

ふりや京官除目と下京とあり法圓と  
ゆいしゆをりりまのりりし  
とゆいしゆをりりまのりり

八番

右御薪 正月十日

家平御位

百変乃百北けりとのゆいしゆ  
氏北よりしゆあまのりり

右階弁親氏令 十四日男

貞典

只乃殿此致メテ人王の御井一ノ如  
く御井ノ御乃らき月乃

新中細き戸云た御井は氏此乃  
御井乃七優よきことゆきと大の  
男踏方れ向くや以殿の御一の  
公御井い御井い御井い御井い  
は右可乃御也

尾御井乃乃御井乃乃御井乃乃  
御井乃乃御井乃乃御井乃乃御  
井乃乃御井乃乃御井乃乃御井  
乃乃御井乃乃御井乃乃御井乃  
乃御井乃乃御井乃乃御井乃乃

敷ハ定落乃乃御式乃乃御井乃乃

右踏方ハ二月十四日此男踏方乃乃

御一ハ御一乃乃御一乃乃御一乃乃

御一乃乃御一乃乃御一乃乃御一乃乃

御一乃乃御一乃乃御一乃乃御一乃乃

御一乃乃御一乃乃御一乃乃御一乃乃

御一乃乃御一乃乃御一乃乃御一乃乃

十乃の男女  
御一乃乃御一乃乃御一乃乃御一乃乃

御一乃乃御一乃乃御一乃乃御一乃乃

此由やうりくさーのまゝとて冠小御とま  
すてかこしにりらりわらやう高巾子なと  
源氏小つりともめ事やうり  
伊勢を天武天皇白鳳二年二月十日百  
寮法入部とをそものゆ事あり是やゆ  
かり(き)

九卷

た賭發 三月十八日

道隆 勝

ありさう狩りればささとりつま

うりあやしーとあーさふとかなん

た内宴

宗時 羽臣

ふくやうり種乃泉此そのくまや

てはこいこゆさこれーやうりやん

判者申云右の券内宴と種泉死しては

先ききし事ハさしをゆくやうり

とんりやうりてあき事ハつぬは種泉死

あくのをゆきあかうりは内宴此をま

うあぬ換ふゆり

左の村は此はけふさといひてきてふりありし  
かきとてつ嗣はききりてききりてふり人  
乃公とてしりかきりよはききり勝りてきり  
左の村は此はけふさといひてきてふりありし  
かきとてつ嗣はききりてききりてふり人  
乃公とてしりかきりよはききり勝りてきり  
左の村は此はけふさといひてきてふりありし  
かきとてつ嗣はききりてききりてふり人  
乃公とてしりかきりよはききり勝りてきり

美原氏かきとつてありしとてりりりりりり  
内一行の及大將はなにかきりりりりりり  
度は此はけふさといひてきてふりありし  
右の村は此はけふさといひてきてふりありし  
とてりりりりりりりりりりりりりりりり  
秋の月よとてかきりりりりりりりりりり  
よ幸しとてしりかきりよはききり勝りてきり  
つりりりりりりりりりりりりりりりりり  
つりりりりりりりりりりりりりりりりり  
六の事保えよ信西とてかきりりりりりり

て修りしを文道のよきあはれ念やく修せ

貞観二年二月十八日豊下院よりありて

ありしにいと見ゆるはるるにや

十番

大原野条

二月上卯日

徑賢僧都

二月廿五日卯時より

とやけしむるはるるにや

大原野条

二月廿五日

秀長羽

新多ふふ一乃代わうきつをせ

三子とあまう此新やうらん

新中細もやまはるは新めちうむの

かよふあひて難やくゆきとも行た

あ積丸

はる原野条二月十一日

たう別乃あ細やくゆりこ此新は

此まうあ積丸らんはるるの平新

とあまはるは積丸うき新はるる

はるるはる原野のあ積丸うき新はるる

元年二月一日始とてこなたとふあつて  
事とて大祀中祀小祀とて事とて一月の  
祭事とて大祀とて也三日此祀とて大祀  
祀とて一日此祀事とて小祀とて事とてこの  
事とて小祀とて約とて右祀年  
祭とて大祀とて下とて百三十二座乃祀と  
事とて年祭とて約とて事とて年とて  
の事とて中とて約とて事とて年祭とて  
新嘗令とて四とて度とて事とて七回とて事  
とて約とて事とて

天武天皇元年二月はけり  
の事とて事とて

十一卷

左能 卯月一日

殿中將 勝

とて人のほとて事とて神とて事とて  
事とて扇乃風とて事とて事とて

右新野祭 四月五日

二位中將

坂衛 卯月五日  
心人



平野乃松又松ふろくくちり  
左身をももふ扇はう勢も乃とけくと終  
凡格もりくくひの公えもひゆ右  
とをををくくひとこひとてふゆ  
くゆとくと移れ勝すいり判者定所  
きたた扇と臣下にををももふとゆの  
公のゆかすくや旬とくひとくゆの政よ  
乃とをゆふもゆは是か四月一日此旬の事  
くくゆも夏を此季のあくゆのゆは臣  
下に御酒とをひ政とまこくゆもや旬ふ

猶も此系ありゆ衰ありくけくまてこ  
くく南殿もあつとゆひてまこるはろく  
と夫所所の旬とくゆ位よはくもゆひく  
ゆく政よりをもゆとくか機旬とくあは  
卯月此旬の月内ゆ扇とりらて上を運ゆ  
終くとくゆつとくゆけとく作法かすと  
わくくや

右平野の系此事はくゆもゆあ細き  
と人とも系よとくゆ人あくとゆ  
とくゆとゆく平野の系は四月上の事



初見乃新大空元年小秦の秘理と云  
人よりよく秘殿うんとうしけんと云  
大空唯神此の事やうとうせぬり  
まうくハ身就年けはまうく何やま  
物まハ神見をいふいふ御うれ  
そらうれ氏の胆神やうくまうくハ美  
和乃うらうりまうく何ハ永延うり後年  
ふとの事ハふたれふや

十二番

た方神奈 可ホリ 四月上卯日

宗信法眼

まうく天此沙代やまうく凡初うも

れかこの神乃まうくやうせは

右灌佛 カクブツ 四月八日有部より

新中御言 勝

さきこの一卯月乃うもつてまう

成之久一まうく此をれあさ

新中御言云右此為灌佛の由と云

かむのうらうき物まゆ連ハ右橋屋造

申ゆりしをなまかほれ此を御言と

人こ中修りてちちが侍生會と灌仙の  
事よやくと勝修りて  
た大神の神とまづり別あり事とわく修り  
灌佛と仏のしるし修りて天龍とて  
て水とて修りて修りてわくは此のしるし  
百かたもよ修りて修りて修りて佛と水  
とありて修りて佛とて修りて灌佛  
とありて修りて修りて修りて修りて  
ち神とて修りて修りて修りて修りて  
修りて修りて修りて修りて修りて

灌佛の推古天皇此御時よりとて修りて

十番

た 賢カセリ 奈 卯月申酉日

頓阿 孫

神とて修りて修りて修りて修りて  
りて修りて修りて修りて修りて  
右 三ミツ 枝エダ 奈

入道 ち 阿 孫

修りて修りて修りて修りて修りて  
神の修りて修りて修りて修りて

たれにふ極此のきし様よまうく終  
し新中御をくゆしはけりらまうくの  
使らうしとさびたりとささあつし  
宗或記はけりれうの御代はあつし  
まの極花をふつきしよたれらう  
はとゆかりし二位中将はまうしり成  
具あつし列者なりき

右記三枚花をわけて酒持のうらりと金  
此文はゆかりをきしよたれらうまう  
わはゆかり持てさうりては

たれにふ此まうしり事欽明天皇の御  
時しゆたれらうはゆかりの近き目  
こつしゆきしゆまのばをゆかりし  
今り人こあつしはゆかりのゆかり  
哉こは玉依姫とては美奈建南身命の  
いよあかりあるはゆかりのゆかり  
ゆかり何上りゆかりのゆかり  
ゆかり玉依姫のゆかりとては美奈のゆかり  
ゆかりゆかりゆかりゆかりゆかり  
ゆかりゆかりゆかりゆかりゆかり

そしちんちん父よとせとらしつれもい  
つらきはこころちぢりくそよつあつ別  
雷命こま也  
右六準川社と三夜糸ハゆりくし祓祇  
念もものちまうし今更な海しし不及  
りも三夜の本ハ古今乃秘後よゆまを  
念れはくくハ只云夜のたとらんとくも  
三系四系乃ゆはらうしひゆまをま  
し因事とらしとらまや

十五番

五ツカノセテ日ノ夕ニ會ス 六月ノ初メ

経賢傍記の

んまをまふとぬのしあをあやめると  
六乃月もくわくも

右騎ハ祓ヒ 六月

女房

射も人の高浦れろくちまき祓り  
まふれまらしりやまぬし  
たれ方六本府のわたりだしそまろのや

右のあやめれうくゆりき祓まきくは乃  
まゆもさ引やまきしよひつるお討みう  
しくゆきハ勝りうまうし 列者ハ節し  
とれもよまかり難なるうしやしており  
まこりもまら

た六月三日會のゆや六日此其の群は  
賜り今ハ給くわもいふやゆきハた  
を備はたあつたならあまあめあつて  
まりのも昔捕の御興くして南殿よりきた  
てゆき右もハた今もまらハもまあつて

たともあつたをこれら傷乃勝村まあに  
六月廿日豊つふ院つていしハ勝村とゆ  
院しけりあつていしとゆきとふち子群  
巨にれあやめの鬘勢と冠よりをてまは會れ  
式ありししやうもまを給けりやと具  
あり事よしんゆき

十六番

乃最勝講 六月

乃最勝

百あや六月乃御法しあつて

新あせうのりあせうをワリあせうきんめあせうのきんめ

右 賑シキウ給 日月

副長朝臣

甲一あもる民此まふふとの〜と

左 寂指講の公ハキ〜と

〜と此あな〜と

〜と此あな〜と

〜と此あな〜と

〜と此あな〜と

出〜なり後年権院沙け〜や

王道場も現と〜と

〜と〜と

右賑給〜と

〜と〜と

按非遠使〜と

〜と〜と

〜と〜と

十七番

九 獻醴酒 六月一日



前大御言勝

幾の世をたるともとらふにまな月此

まきの醴酒をうらぐふ

石礮二日晦日

守長胡臣

六月乃り下りてゆく

そらうらもあまの日のこしを

新中御を申云た多難越りてゆきま

くくつをけりてつとて

ゆり石を施米の公や

帝よのらさけ氣味あつと

定ちトす

たはこさけと式文よゆりあやうふ

はくしうははるふとむくハ口伴米

と齋て宿を徑て酒よはくしとや七

月海をまて毎りにとまをてまう想

神天皇乃所けりて

大施米つくと寺れす

系よ米を施こす勢路ひーせらる子

御よまきくわらまをた臣かと陣よあうて

定し事しとゆり也

十八卷

左大坂 有月也

右大坂

左引乃あさ此のめりさしきりしきり  
百此のなめりもきりしきりしきり

右廣瀬龍田奈 七月

宗時印臣 賜

正月のまきのふ此のな此の初秋

まきの二の神まきのつりな初秋

たなる引此あさ乃ちあささりしきりしきり

さぬまゆりしきり

右此の此のな乃三月月二の神まきのつり

さぬまゆりしきり其あささぬまゆりしきり

と判考し也

右後とさる右のな来権門のあつりしきりて後

さしゆりしきり六月海乃まきのな六月

後まきのさしゆりしきり其の群臣一月

あつりしきりて後まきのさしゆりしきり

あつりて群臣まきのさしゆりしきり

よりハ所々を流しよは後ハありませ

六月よかきりく

右房既跡田系よなり子細形一由は  
を屋よあはよありまうつりありといむ

より風水此難し乃とも年較乃ゆい

此事といのりやさりしや天武天皇四

年四月よすしゆりしり平紀より

このと海起りしときゆりあひく

かこしきなり也

十九番

た乞巧奠 七月

為邦朝臣

織女よきふらも向れふとめは此

くまもや秋の装いなり

大盃蘭盆 七月十五

前大細

きやそや日影乃つらもきやん

玉まうつふ七月

た奇織女よも向れはよみよ

あしきゆりもゆりねとよと

難かちきま

太田を乃げふはとらふたのひき  
ていふくはえのりくしんくしこ  
持しとていふやう

たを巧真の公ははの事とては  
いふまじきま及まじ

孟蘭盆乃事ハ佛す子目連母此在可  
んくぬくとしてはまともうけ

徑又よゆりくむじく有明ちをれは時  
ありなり事ハ須弥のこまじく

あまのこまじくはまじくはまじくはまじく  
てまじくはまじくはまじくはまじく  
ゆきハちまじくはまじくはまじくはまじく  
のありふれと下みは氏物はまじくはまじく  
とハゆとまじくはまじくはまじくはまじく  
魂糸と事ハゆりかあぬるまじくはまじく  
それハ人の魂をこまじくはまじくはまじく

大香

大相撲 七月廿六日

如房勝

ついでとてしる使のりしとてしる

りふめきとて此をあらあをありける

右 新 報 穀 奉 幣 七月十九日

大 藏 卿

新 報 穀 奉 幣 七月十九日

新 報 穀 奉 幣 七月十九日

新 報 穀 奉 幣 七月十九日

新 報 穀 奉 幣 七月十九日

新 報 穀 奉 幣 七月十九日

新 報 穀 奉 幣 七月十九日

右 相 摺 と 不 事 の 法 國 の 信 仰 人 等

ありき 七月は 相 摺 乃 ぎ け の ありき

行 へ る こと 子 沙 洗 す の 也 こと ありき

り ありき 後 事 ありき ありき

と 不 報 ありき ありき ありき

り ありき ありき ありき

相 摺 使 と ありき ありき

義 及 び ありき ありき

事 ありき ありき

方 ありき ありき

のりいゆる  
右のす一社ニイの御幣をさし入て身殺のゆ  
ふたふたん事と祈りし月よりたたりてか  
ふとふたふたのりし

大書

左の野糸 八月四日

蘆堅

きめじりぬらぬまうしつを御奉しり  
小野此家みの海らりりりり

右釋奠 八月五日

二位中将 膳

かゝ人のうしつを教をいりしりりり

可此とむとせむしりりりりり

左の野御社の糸此にゆまの細るゆき

とらりり人のうしつを教を奉る御

高いゆを真ありてのりし膳しりりり

者之すりりり

左の野御社の御事ハ人とのことまふ

事ゆりりりりりりりりりりりりり

けりりりりりりりりりりりりりり

御時よりしりし御の

右新真といふまゝ之を孔子老子顔回とま  
つりゆかりのち字彙より御新集の御を  
供具とするの詩をばつてま秋三月八月  
此礼真の字をまらつたなり文氏天の宮を室  
元年二月ふくし御とて御の乃所系  
孟子やんは伯夷の曾此法なりなりなり柳  
下恵の曾の和たりものなり伊尹の曾の  
にちりりのなり孔子名の曾の御たりりの  
かり入るとゆかりなりを一言を得るなり人

とそあきとも孔子此なりにはけよまらひ  
てありなりちちをかりなりしといふなり  
曾の御と刻よつたなり祓よと具ありてた  
りえなり

か二番

左殿ツツ 八月

家子羽臣持

まうりせし八月のこをばつりか  
まうりせしなりなりなりなりなり

右甲斐駒牽カヒノコマキ 八月十七日

入道大御言

時きのぬいぬいさふさふさ秋の田乃

穂攻乃出ぬとまきりけり

ほほよのかれ難題もゆるりや

たの秋もゆるりゆるりゆるりゆるり

阿まきとほほ難題も優しと持たる

うし人て定ぬ申さ

ほ昨を今もまらつとふ申ハ昨りの秋

眞の供具こい糸繁より日裏へとまらる

やとけとふ御食もまらるるやあまの神

供かるとと下がり

右勘川の甲斐岡穂攻の御牧の駒を八月

十七日まらるる大方御奉ハ一年の御百

足ぬくゆるりゆるりゆるりゆるり穂攻の御馬

ハ三千正今日もゆるりゆるりゆるりゆるり

お踊りあつて御流しけりかきとるる月

の駒の御流しけりかきとるる月

そいし合やるる事にはりき

ホニ番

乃定考<sup>アウキテウ</sup> 八月十日



嗣長朝臣

かゝるまはらうきとまゝしつて位よ

さうけり及むつをそとく

右 氏花野 卯年 八月廿五日

頼阿勝

いこう野とまをましつてのま

まふ女系のみたふか

乃らまはとまふのわが雅題をわが

まねわくくそまゆくちむしり

むくまのなましつてゆり

いよりくゆきハ勝り(きり)一月

定り

乃定考とつらハ首六位上の加澄

人からそそ強け秋とえつて官爵と

つをふ也選叙合ると小こゆり

任の右右拾勒りまよりて官爵と

まふやうけ人し選叙くまゆり

とふりなり文字ふ定方と書て

とまらうぬよ考定別者純

と定り

た八月十五日ハ幡御林放を云の事  
後この目録の事ありきよ  
はるたをいふ生をいふの  
生此といふ家勝と信長者は流氷  
界地奥の事いふことありき  
右の所いけり所のいけり  
さぬくすの事いふことありき

右ハ八月十五日信濃乃初旨此馬を  
ふやするの御牧といふことありき  
之乃いふことありき

と定る事いふことありき  
此事いふことありき  
いふことありき

サ五番

右 上野御狩 八月廿八日

宗信法服勝

上野の事いふことありき  
くけいぬ月此をいふことありき

右 桑沖讀経 八月廿八日 九月五日

殿中将

中野湯の湯をりきしぬまの春秋は  
くふ湯乃くのるしやせん

はうまはせといふ古きゆりく新まぬ月  
可くあきしきまきよまゆえゆりたるま  
いふおろりくゆきまをたはつりまにし  
かひくまぬやれかゆ一きれく判るま  
た是も上野湯敷の流る八月あいの門  
かりの細も前よりゆりぬたのまゆ湯漬  
とそち湯着経と春秋百変くと稱せり  
るゆ茶とく僧の茶と経りては

昔より茶の公家なりてゆりゆりよてまけ  
まはちゆりも茶葉なりとゆりゆり中比相尾  
上人とやん茶乃種とゆりゆりゆりゆり  
まにゆりゆりま

國史よまて平十七年九月子ぬり中比相  
六百人とまゆりゆりゆりゆりゆり  
しゆりま真観のゆりゆり年ゆりゆり  
かゆりゆりゆり

お六巻

お六巻 九月  
お六巻 二月

貞世勝

予も中下へ星を志す内ふり那

右不堪田巻 九月七日

廿房

正乃秋の所此より秋好ましく  
作しむる女坪分を 此より

右房の女債は修りし一月は構表  
私志も定巻の如きし一月は構表  
しきりし列者中修りししと修  
と勝し修りし右房の如きし一月は構表

よ灯もくもまうく修りし一月は構表  
えく田抄後ハも也小山北靈巖寺と云  
下もくも修りし一月は構表  
右不堪田巻

右不堪田巻として法書の四枚揃として作  
左の及は此目録として修りし一月は構表  
これより修りし一月は構表  
ありし也佃の請回し坪分を  
左もくも修りし一月は構表  
此より修りし一月は構表

廿七番

右重阳宴

九月九日

内右衛門守

菊紅葉行くよく氷奥を死すく

今日経ちゆくんまこれく

右例幣

九月十日

守長

七月やとら子死くよ浮世のあは

浪のよゆくちくま

右重阳宴よ氷奥と経ちゆく

海事よんゆらん右をとらるる

白糸綿、けちくこつう使あり七

もハ、まぐ勝劣かしくも持よ

右九月九日少くゆきハ菊花宴を

ねこちうしうしうきを右重阳宴と

九月陽乃ぬかりく易く

月也り九やれハ右重阳とふや

海也くまそい面白事なり今日

氷奥と経ちゆく其例あり

十月此旬に氷奥と経ちゆく

よき例ありきま

右九月十一日例幣として伊勢を神宮(伊  
幣)とてまうと云ふ事乃ありとあるの  
まがれはしる事なり交りぬるよし

大八香

乃撰出ハシエラヒ

忠頼朝臣

いりくはさう野乃むしとまへ人乃  
花もくをきしとふかやれ

右十月更衣ヨロイカ 百

為邦朝臣勝

本紀之く露をのく又衣ヨロイを  
着る事とてわしと云ふ事なり

右九月十一日例幣として伊勢を神宮(伊  
幣)とてまうと云ふ事乃ありとあるの

まがれはしる事なり交りぬるよし

かろくし人く一日よまし

乃撰出とてまうと云ふ事乃ありとあるの

ふかたけきとを殿上の道達として殿上人  
ともいふひてさうゆをさうゆとて出立  
申と云ふるをいふりけり御事とて  
ゆきと秋乃題此中に加ゆ也  
右を十月又衣此幸別乃と云ふ乃及ゆに  
廿九番

右射場定 十月令

二位中将 勝

右のまきく今日此まきく乃射定と  
いふひししと云ふししのみりぬ

右維摩會 十月十日

新中細之

右清くは御海此法のしと  
やまよりゆふし中をえみしと

右射席まきくゆりまきくまきく

ゆりまきく紫めくゆりまきくまきく  
し判者下分を右維摩會會員に定  
りしれき

右射場定は云ふ此ゆり場殿より  
てらとゆ洗すりぬるゆり場定なり

是を村也神のまをりひ新紙がと家  
此は何の文とゆきききし（五）鞠かといふてう  
村秋びらうらまきふ人（とま）くかききよ村  
席とまらうと射座やま子もは射座と  
まらうれと子ふらうと村紙紙まらう（六）礼記  
まらうらうと面白まら

右の奈良此山階寺かといて十口より十  
六よりふゆく維摩経と講まらう  
や昔の法海公此教少く唐國へまらう  
か大舎くたゆる也百済乃唐相傳ゆらう

縁起まらうけり

むー大藏冠病懺めらう百濟回の法明  
比立まらうてらう我ち奈経といもあす  
ゆいままらうと名はくらうまきと彌彌  
流るはらまらうらうとまらうらうら  
まらうまらうらうらうは御座らうは  
あらうまらうまらうらうらうらうら  
今當りしてまらうまらうらうらうら  
まらうまらうまらうらうらうらうら  
まらうまらうまらうらうらうらうら



三十番

乃在田糸

丁月中申日

兼熙勝

百と勢をこもるく此霜と冬と

右五ゴ五セ五チ 丁月申日

徑賢僧都

立つるよめ此よめあつるよめ  
月よめあつるよめあつるよめ  
た白もやううたーよめあつるよめ

他人のかさひささささささ

とととととととととととととと

之永康四年此身合とと春の日と

秋とととととととととととととと

ゆきとととととととととととととと

た吉田祐の春日園舞のゆきとととと

也糸の式舞をりまのゆきとととと

右の長とととと清見原天の苦野のま

たしとととととととととととととと

もをりてとととととととととととと

是のよはれはしつかりや

廿一番

た新嘗三井イメ廿二月中卯日

願系

新嘗やまのふのしりかたさめきく

まあふんきくをもうふ重此上人

右豊明トヨノアキラ廿二月中

區堅

いぬ多秋ねまうしつあはも向名

まじしゆさうさうまもあしげ

たたつきもくたさめとけぬしりかのを

く勝方たもくまうらうりま物さう

判者申し

た新嘗分もくハ今〇れしりかを新

まもくはあや代この始ふ新嘗し

毎ののく新嘗しとや用明天日

四月より始ふ

右豊明も今もハ今〇れ物さ新

まなつたもまうらうしあはあま

あまあはらうさうしあまあま

此志也也了七世ふよりきりくはるるを  
子細六百番よりなるも重くしあらし  
とも也

少二番

尾賀宮陳所奈 二月十日

宗久勝

りるゆり雲衣此河凡ふある乃  
神はくくをい言ささあらん

右 月次奈

六月十一日 五月十日 あ夜

宗時明彦

友比之乳年乃とくくよ月正と乃

兼齋

神一乃神一乃乃そく

尾山あ井乃神ふつぬよ甲子まきゆきを

神よ幾い友雪ささふらむかすと優なりよ

しんくしき右夏乃らき年此流るゆ

ふハ二度此月次めよりくまきまをゆれ

毛山の介神今辰うととゆきをゆいぬ

つきやうんしき負ゆりま

た聖哉時奈事字多御門のまき玉ゆ

流よりゆりけり時ありし冷いぢらよ乃明

神現し給ふて臨時の条と云はれ給ふとき  
くしやも給ひ申すの事  
と云ふ給ひ申すの事  
けも可申候ありて也と云ふ事あり  
くしやも給ひ申すの事  
帝位よけるも給ひ申すの事  
多事も給ひ申すの事  
也に給ひ申すの事  
右月頃の条に六月十二月に就て  
云々

世三巻

凡神今食 三月二十日

入道大御言勝

ゆきぬきしき  
神をぬきしき  
取らぬ  
かた

右門侍所 十二月撰日

負也

久く此あめりし  
いしやも給ひ申すの事  
た神と云ふ事

右あめの昔の神ありといふ言ひし事なり  
ゆきしと移りた此勝は定ありきゆき  
た神念食ふ御門のありつ神は神依  
と故をともうつゆ終り也むしハ者中知  
院は御ゆき成く身つる神信とまら  
ふてまうを終ひるやいふ神祇道なり  
ほくありや

世四番

た佛名 十二月十九日

中房 勝

所ふしちうきまりしれ久しき  
身ありあしかりき

た荷前箱 十二月廿三日

宗信法服

かーこーまらまきれあまらひりく  
年ふらうんをりつしは  
たらうき海ありれ久しき乃いふし  
まかりしゆりふふ 媛艶はゆりし列る

右荷前此箱万系此古紙乃多よりありて  
貞一書にありたりてふきりふりたり  
かとも程に勝の家はなにも終りきり  
とをいひたり

右佛名ハ十九りより一亦一りをて二三日此  
ありて三世乃後佛の仏名をてとて  
此はげとてとていひたりゆりてとて宝氣の  
二月より一月の康和にありたり

ありて貞親のころより一乃二乃三佛を盡圖

よありては法圓へくもてとてはふりて  
よんをよみたりありてとてま事たり  
相親やふたり此正勝存此相親存とて  
ころより御酒とてとて教とて勸を乃  
ありたり相親とて中頃此名とてゆりあり  
右荷前とてとて此正勝ののりてとて  
帯帛とてとてとて坊終りありてとて  
おとかり事あり

世の書

たそひり 十二月晦り

秀長朝臣

霜さるく竹る葉凡とあゝるる力

うさぐさ此神ハ移やさやらん

右進衛 十二月廿九

内大臣

いさふをき一舟のあゝりあゝの夫此

いさふをき一舟のあゝりあゝの夫此

左行乃る系ふもあゝるる人のあゝりあゝ

と倭子あゝるるあゝりあゝりあゝりあゝり

とさうとさう此神祠とさうとさうとさう

一きよあゝるるあゝりあゝりあゝりあゝり

たさ良おとらハ神進官十二月廿九

物とをそとさうとさうとさうとさうとさう

つらあゝるるあゝりあゝりあゝりあゝり

先ハ神代とさうとさうとさうとさうとさう

右進衛とさうとさうとさうとさうとさう

とさうとさうとさうとさうとさうとさう

物とをそとさうとさうとさうとさうとさう

先ハ神代とさうとさうとさうとさうとさう

右進衛とさうとさうとさうとさうとさう

とさうとさうとさうとさうとさうとさう

くはゆりまじし

四月ありたきうしきたりとてまたしよふ  
てりことしりもく候子とて二十人えぬ布  
衣きしりのとてうしと日暮れ四門とさふ  
かり慶雲二年よりししゆりて

亦らぬ

右家南殿橋立

田舎にわ

あしきしよふし沙路乃橋立

けしぬちうきゆりめしあまらりしと

右家南殿橋立

新中御

うはりしゆりししよの御ひり

しゆりしゆりまじしあまらりしと

ちのぬかけしきしりさうといぬは氏

ゆはの方とたりし優よゆりし勝つさ

し別者トといしとちと出立のし

らとにいしとちと定つて見

南殿乃さう橋立事別りちまのゆり

公事かといしとちとちゆり禁中草ま



事ハ禁抄抄りしと云ふふのさし  
ゆき別してはしりまなま

亦七巻

た多所溝水立

抄房 勝

かうとこれまらむきらるんは此  
一多とけり水らま此あ

右方竹巻を

入道方細を

すもふる所を此を此河舟此

一取のゆしとくき中卯

せあるれたの河行しり沙溝水乃系

ハ美まらりりり列者も定卯卯やん

けたかりらふに此系上待とつきて

此溝水よりりりり事此同家あり

河内をも持たふふとふ乃をこまうて

うくけりまをゆりりりりりりりりり

あ内ふふりりりりりりりりり

右ハ流流久ハ其所は所此巻よま

ゆき別乃子細りりりりりりり

世八巻

乃奇良御殿云

前大御云

かきしりしきまきぬみひのりきり

かいよりしきり一人のたりしり

乃奇良御殿云

家尹御云

かきしりしきまきぬみひのりきり

かきしりしきまきぬみひのりきり

乃奇良御殿云

乃奇良御殿云

乃奇良御殿云

乃奇良御殿云

乃奇良御殿云

乃奇良御殿云

乃奇良御殿云

乃奇良御殿云

乃奇良御殿云

乃奇良御殿云

乃奇良御殿云

伊膳と供と御事に依りてはるるを  
いり飯を侍るる也

北九番

たき萩元志

領阿勝

おとねふり糸のそはく萩のそはれ  
あつりし書をつねくつしと

大壽桐壺志

兼照

おちのよみあつりし書をつねくつしと

きりひかりりり人めたりしや

たふ今乃いりりある人此のひそき

とあり方此の面白とつしよわくゆり

たは花ちれよもよもあをとりぬ桐壺乃

あはれ事りやとぬ人となひひらる

としやまを人ゆりし人知るる萩の下

葉のいらりりりりりりりりりりりり

た萩乃そとる萩と人をよむるりりり

年しきりりりりりりりりりりりりり

てゆりりりりりりりりりりりりりり

くくくくくくくくく

右桐壺と丁の取景舎かゝり桐壺と  
くられり火の桐壺とPやういふ舎は  
し壺とくくくくくくくくくくくくく  
たれれらうまわいさき殿也

四十番

たす梨壺壺壺

頭紫

いふ人のみれ人もわくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくく

右寄藤壺壺壺

中房勝

右壺のやうきまかりくくくくく  
くくくくくくくくくくくくく

たいくくくくくくくくくくくくく  
めまきくく後撰の撰者のまき老人と  
あまのまきまきまきまきまきまき  
右壺あり海やまきまきまきまきまき  
くくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくく

左京土垂ハ眼湯舎かゝり是七保と云  
子久しれゆきを何と藤つかむ香  
舎やう又及花けりちるけりや中  
比ハ鷲冠本々かゝりりり葉秋抄  
と云ふこといふ

四十一番

尾多梅壺

貞世お

ふふとつも此くりるふけり  
うきうき七日程残り

太奇雷鳴土垂

二位中将

人かしく月ゆきをくく

行くとくあそびとく

け書ハなつとら幽玄此く一同

いりけりやあけりりり判者

たきほの氏ゆは秋好仲之此いつ

まよもつてち極殿とてまの

とくし経く乃ら冷泉院入向

て梅壺は位給いし事やゆい

らまきふしふ七優表りりうに梅壺の疑  
花舎をて移色いこうきくつうの事と刻  
乃多ふりあうんじやうしやくやえはり  
大又難絶としゆくと筋恒く雷鳴を壺と  
こつこま福てあうとらんとくまの記  
よ優まゆりくく雷鳴大壺の籠表方舎なり  
むくく雷鳴の大将今下近末乃次将見  
警固くく沙門と守護しやうけり是を  
雷鳴陣とて尸ゆりまや

四十二番

大寄壺前栽立

菫虫の

次芽生れをよのほろいりくく入と  
雲の此月よふとくくくをまひ

大寄同藉立

徑賢僧都

ねりふをよふとたうくくわいおん  
まよまののこまきくくいせゆれ  
たもと源氏ゆれの壺前栽立むと  
くくくくくくくくくくくくくく

ゆゑししと大向籍のむをねまゝゆは  
あまの指さるまゝし二位中将よりま

しつゝ判者もいふりし

尾重前裁の相違が御門更衣の事と

かきつゝね月しつゝも中前めはあま

さいとかうめはいしつゝやあまのめは

一巻のしつゝしつゝしつゝ

大向籍しつゝかう籍のしつゝ今と

同籍しつゝ殿上のしつゝしつゝ

るやと御門のしつゝ籍のしつゝ

系譜のしつゝ

四十三番

たあ東のしつゝ

為邦朝臣

ゆをたつしつゝあふらまゝしつゝ

りつゝまゝりしつゝ此まゝしつゝ

右宣命

抄

しつゝむちりしつゝの位とんまゝしつゝ

のしつゝしつゝしつゝしつゝ





吾思よふくを勝家のこころを

右証書といふ事ハ是と云はしるべし

かきあしきしと旅切しる事と

ゆり宣命ハ海にくだはるの勅也

あしきしと証書も同じ事と云ふ

佐卿はあまて覆養とて二名奉をたて

可乃字あしきと云ふ事此子御也

かきしる事

右証書と云ふ事此証書といふ事

龍彦と云ふ事温はと云ふ事

十と云ふ事もは行て事と云ふ事

甲五番

右証書

前大細

右証書と云ふ事

右証書と云ふ事

右証書

新中御名

右証書と云ふ事

右証書と云ふ事

たふれりしゆのそついとまふ極なれども  
この月出たては極ありて返るるうへへ  
空のしゆりきたるまうらんとつらま子  
此はえ旅の時とまよとも現任の公卿乃  
中より一老年の人をえりていへし海を  
舟をせまうりて後朝と執事と事のは  
大の御覧此の略杖撰集の中はれかく  
よと有りて一の事なれしと委は下よ  
四十六番  
三友

お天文奏

宗時朝臣持

かきりてくへくへくへくへくへくへ  
あまをまはしむるまらりていへし水さめ  
赤の星光あまの影よあつらえたり  
赤瑞ふくまふゆりよ右の雲よ水主

僧宗久

此神をまつりあるを 神のあつては 神の  
世の事もハコトとらて 神のあつては 神の  
別者ト云ふ

乃天文奉りて 司天の 神 密奉り  
宣旨とて 奉りて 慶應 奉りて 奉りて 奉りて  
は 神の 奉りて 奉りて 奉りて 奉りて  
乃いて 奉りて 奉りて 奉りて 奉りて  
ハ外 奉りて 奉りて 奉りて 奉りて  
執柄の 奉りて 奉りて 奉りて 奉りて  
乃ち 奉りて 奉りて 奉りて 奉りて

乃ち 奉りて 奉りて 奉りて 奉りて  
乃ち 奉りて 奉りて 奉りて 奉りて  
乃ち 奉りて 奉りて 奉りて 奉りて  
乃ち 奉りて 奉りて 奉りて 奉りて

早七番

乃止雨

傾阿お

乃ち 奉りて 奉りて 奉りて 奉りて  
乃ち 奉りて 奉りて 奉りて 奉りて  
乃ち 奉りて 奉りて 奉りて 奉りて  
乃ち 奉りて 奉りて 奉りて 奉りて

乃封事

乃房

あゝとぞおしほいさむとふくを  
能あやうくやあむ世ちかたも

あはれも度保のこころあはれありて  
あまのり

右程あやうくやあむ世ちかたも  
いしこりくも諫言といふか  
にうて持ふりまうし別老をいさ

た止むといつた時を新のいせ唐紙龍  
田乃非も延武の止ぬり私に文を

あさむらうもあしりあうこれ事  
アさしーいりせいと陰かくゆる竟能  
傍の本もく誤あまは一刀此ゆふ書  
世をけりせむれは沙洗してほむるを  
さむけりくもみ能報もさむあ  
政あまはさむをましてつらめりり  
とゆりけりや封事とるにふたふ  
政子守る人ゆふ能言をよふんあま  
難題の身てかす此事とるん  
まやあしりくもあしりくも

四十八番

た恩赦

二位中将

えいよのりくさしとありてを移りてや  
はらありとふふまをぬらさる

右牛車

忠頼朝臣

ワきくえられつふり人の仲れあふ

うし車ごひくくろく

たさくもあつとゆりて非常に赦の義

子町てさるは奥あるり人く

はらふ人の中れ果とゆり行く

はゆきも持と判考定り

た恩赦とふ囚人の獄令よある

さし先をうりたりと移しゆと

もをうりやるふ中ゆりて

かしたまてさかたる事つねの

大赦もかして天下に宣事

能みとさかたるもしきし郎書に

とゆりてふくせんを

よせにさるり

右牛車と云宿老乃大匠下と陣中(車  
まうしとくをて中此志と然入と云事也

四十九番

片庚申

為邦朝臣

出づて移とやとぬのたまふ

あつかひみ清やうのうらん

大奏慶ダイサイケイ

入道大御言勝

ワとれりや二代よこえし一伝と

アウラウラよと海の一舟を

おのたまふ古歌の詞をなまきと云

二代よこえし一伝の公あつらん

老して勝は定あらん

片庚申此東の三戸たよらうし人

のたまふとほくともや内色は和と云

てゆぬまをなれともうしりま事なれ

いとうしりまなるん

右の昇進たしとの物なれしをてゆぬまは

別乃子細記し

五十番

た輦車ハカ

為邦朝臣也

雲井のもよりくふふてうまや

きまよむりくし海一ちりくん

大ミカド唐ミカド高ミカド窓ミカド

女房

我国のと成すも入て年いよふ

いもくしれあそふことぬ

た輦車君よむりくし行のちりくん

優よゆきしとちを年毎五百頃のそ

いりもよまゆりしも可憐く七列者

アールトし相おし行りくし

た輦車とアハ論とけりしと興乃好

作り車也是とこりくし宿老の大臣

みせ居るをよと此ゆりて大内此ゆと

通をよふのちり相をのふを車

とゆりれりゆりし流民ゆはしゆり

大内唐高窓とゆりりくし此の国

一 本は唐の初より多かりて後より少かりしを以て唐の初より多かりしを以て唐の初より多かりしを以て  
昔は唐の初より多かりしを以て唐の初より多かりしを以て  
一 けり神印の旨は此三韓の初より多かりしを以て唐の初より多かりしを以て  
いりし年正しくし厚責ゆきしを以て唐の初より多かりしを以て  
はと持統天皇の比より多かりしを以て唐の初より多かりしを以て  
より多かりしを以て唐の初より多かりしを以て唐の初より多かりしを以て  
いりし年正しくし厚責ゆきしを以て唐の初より多かりしを以て

本也足軒本校合字

讀新合教教卷之二十七

續庫

内裏九十番御所合

應永十四年十月十九日

歌

寒月

浦雪

神祇

作者

九方

御製

後小松

崇賢門院

入道前右大臣女

為定卿女



國自道一位孫承胡臣 仰嗣云

入道者大改太臣 宣冬云 法若常大

道一位行九大臣孫承胡臣 良嗣云

右大臣正二位孫承胡臣 乙行云

征夷大將軍道一位行權大納言兼右近衛大納言孫承胡臣

沙汰常宣

正二位行權大納言兼左近衛大納言孫承胡臣乙後

正二位行權大納言兼左近衛大納言乙宣

正二位行權大納言兼左近衛大納言實任

正二位行權大納言兼左近衛大納言忠宣

沙汰清宣

正二位行權大納言源朝臣通宣

從二位行權大納言兼左近衛大納言資友

從二位行權大納言兼左近衛大納言宗氏

沙汰常承

參儀正三位孫承胡臣隆宣

沙汰宗條 條一

正四位下仍左近衛權中納言孫承胡臣基顯

正五位下仍左近衛權中納言孫承胡臣雅德

沙汰中繼

小比叙祿宜祿於成胤

法勢前大僧正法平大和為位乃云

亦大僧正法平大和為位乃云

僧正法平大和為位道為

僧正法平大和為位道為

二品法親王永助

右方

准三官

二品親王義仁

西二位行指大納言藤原朝臣實家

經定乙女

從二位藤原朝臣乙敷

少孫實雅

内方長西二位藤原朝臣

備卷云

氣後從三位右邊藤原朝臣乙雅

正三位行指中納言藤原朝臣為平

正二位行指大納言藤原朝臣重光

從二位源朝臣具言

從四位下 行右邊藤原朝臣實家

氣後從二位行指大納言藤原朝臣重光

從二位下 檢中細之 蓋尾屬 爲右系 躬長 蓋官  
卷儀從三位 爲系 躬長 滿親  
從四位上 行刑 躬長 爲系 躬長 爲蓋  
檢中細之 從三位 爲系 躬長 經書  
藏人頭 正位下 躬 右進 爲系 躬長 躬長 躬長  
汝孫 躬長  
檢大僧 躬長 爲  
檢書 躬長 慶成  
從三位 加裝 賜之 確久  
侍從 下位下 爲系 躬長 爲負

沙彌 教念

從五位下 躬長 爲系 躬長 爲國 爲  
爲大僧 正位下 躬 躬長 爲系  
正二位 躬長 爲系 躬長 躬長 躬長  
正三位 下 躬 躬長 躬長 躬長 躬長  
正四位 下 躬 躬長 躬長 躬長 躬長  
正五位 躬長 躬長 躬長 躬長 躬長  
二品 法親 爲系 躬長

備原

讀原

判者

一番 寒月

九勝 御製

雲の下のくろくさく月乃殿よりあそ  
ちとせむねをねまのこころ

右 准右

洗人のよりのしんじくりの人乃  
月のこころの神のこころ

二番

九勝 崇徳門院

さくさくおのころのこころのこころ

ともよしのむねの月をくまらる

右 義経親王

さきぬのこころのこころのこころ  
ひろくさくさくさくさくさく

三番

九勝 入道前太政大臣女

あそびのこころのこころのこころ  
あそびのこころのこころのこころ

右 権大納言

あそびのこころのこころのこころ

きくりや歌のなぬこさきん  
四曲

九勝

為定卿女

やとれ月はわらうるぬりあすも  
さもつるおそれ神のこころを

九太

経定卿女

あけもさかきり海のさきも  
あつらひの月れしほそこまぬ

八曲

九

開白

あけもさかきり海のさきも  
あつらひの月れしほそこまぬ

右勝

前大納言教

いほりやあけとほ志りふとさき  
あけもさかきり海のさきも

六曲

九太

入道茶太政大臣

ひらき吹山うらむさきさうえら  
月れしほそこまぬ

九太

仲孫守雅

氷のそとみるより雪ハ物きえく  
おろし魚のそと月のおきしな

七妻

たお

たお長

むし雪成らういほく雪の山風  
るはさるゑおのそくの兼は月

た

内大臣

ききりしおそよの月成みいほ  
しほろしおそよの月成みいほ

八妻

た務

た大臣

おろし魚のそと月のおきしな  
月をそよみ小新と月成なり

右

右大臣の云

交月となは成らういほく雪の山風  
おろし魚のそと月のおきしな

九妻

たお

右大臣の義持

おろし魚のそと月のおきしな  
うゆとえしほく雪の山風

大

檀中納之乃尹

いよしはらやちんさの只のまゝとる  
あつたむじうまの兼は月

十

た

少休常一室

をのつらきうのまゝとる  
あつたむじうまの兼は月

右勝

檀中納之靈光

あつたむじうまの兼は月  
あつたむじうまの兼は月

十一

九

檀中納之乃後

山の傍とあつたむじうまの兼は月  
あつたむじうまの兼は月

大

檀中納之具言

あつたむじうまの兼は月  
あつたむじうまの兼は月

十二

九

檀中納之乃宣

あつたむじうまの兼は月  
あつたむじうまの兼は月

かゝるききりみろの夜の月

右

實秀の長

あまのりやあはれとこわらむとせむと  
新うり月〜〜〜と好の月の子

十三夜

右

指大納之宮

うららき〜〜〜袖〜〜〜あまの袖れあ  
ひと〜〜〜とや月よ〜〜〜

右 務

春儀の俊

あ〜〜〜せれ井かたさ〜〜〜あまの

とこきそよあふ〜〜〜初日月新

十四夜

右 務

指大納之忠定

あ〜〜〜のうた〜〜〜と〜〜〜と  
九うた〜〜〜とあ〜〜〜の月

右

たきつゆの首

さゆの葉〜〜〜と〜〜〜のひらり  
秋〜〜〜とあ〜〜〜と〜〜〜

十五夜

右

ゆゑの長



かきまへともおれん子孫くともむ月乃  
文ありまうに新とこるなる

大

糸侯満記

見るよりい葉ふく記空の雲おさうえそ  
袖うと月のおきをそおまはら

十六巻

大

橙大細之通宣

雲さけるみしきの竹のよもいともふ  
かきしぬ月のしげそおるなる

大 傍

乃藏胡臣

ふきに捨くおの波さうて物りまう  
さけるおれ葉れ月のいりらふ

十七巻

大 傍

橙大細之通宣

さける葉のやうとあうねそ山乃まに  
あかなるおれ葉のほる月新

大

橙中細之通宣

鐘のそらと角くさりふおきしきふ  
おれ葉のあいにこるる月新

十八巻

た 務

桂中細き家氏

さゆら華さあ~~~~の言とたつとあ  
あつふふさかろ月ろくけしれ

た

家量朝臣

新よこしにちとととんくしあめのあ  
まのゆりあうきあその夜は月  
十九夜

た 務

ゆゆき水

くま折れさ枝ふやらり月あけて  
あられ吹きく華ハのこりし

た

少孫結信

風さ終家あらのころあふふとあて  
ころりかさぬるあう華の月  
二十夜

た

冬溪踏巻

久さのを牛ふさあてみつとこり  
こ何りふあぬるあせの月新

た 務

桂大増部亮為

あはれああとしみちぬる華はとそや  
月あつあつゆきゆきあつあつな

廿二歳

た

少孫宗孫

新くつる月をば神り志たれりやぬ  
少きまてし神ぬ事れおのきしりち

た 揚

檀大僧都考成

さえしつ月るこなりつとこつふん  
なれ久しき法代てすせん

廿二歳

た 揚

基親節巨

はゆふ事と文の袖れおれりふ

こなりかたぬる月のつげふ

た

後三位猶久

あけぬるう霜葉のし林乃し急りりと  
なつとさつとさつと月乃新し

廿二歳

た 揚

雅清

すこのや新新うりやうくさつる葉は  
あつとさつとさつと月をこやれり

た

み貞

さしつらも新しあつとさつと

あかしくみぬる庭の月う半  
廿四夜

た 拵

沙弥中繼

あゆみぬるあさきもほろ乃 宿まうり  
ひより夜そくくはかりの月う半

た

沙弥黙念

なるの葉とあうと 乃葉く 玉葉乃  
庭のまきこのあさ乃月う半

廿五夜

た

小比叡社直社成鏡

あゆみぬるあさきもほろ乃 宿まうり  
月さきこのあさ乃葉のまきうせ

た 拵

沙弥国清

あゆみぬるあさきもほろ乃 宿まうり  
こかりそ月れあきそさうやげき

廿六夜

た 拵

前大僧正長春

あゆみぬるあさきもほろ乃 宿まうり  
あさきもほろ乃 風のまきうせ

た

前大僧正長春

新まゝに記す間此月乃き終る書  
とくちりくあるは終る終らせ

廿七歳

九 揚

前大徳正長

あまのりくをこれみそゆく風きて  
あ乃うへにこはる月くま

大

前大徳正長

見るとまの屋とれる月れくはうて  
あかりとくまの九歳の産

廿八歳

九

傍正長

あまの浪風とあけ海のうま  
あまの月とあけ海のうま

大 揚

七種正長

あまの月とあけ海のうま  
あまの月とあけ海のうま

廿九歳

九 揚

傍正長

あまの月とあけ海のうま  
あまの月とあけ海のうま

大

豊光帖

ふきさくはらうらひはうらてはゆめ  
もはゆめうらひに月やまにん

三十二番

大 坊

二宗法親王承助

風きさくはらうらひはうらてはゆめ  
もはゆめうらひに月やまにん

大

竟仁法親王

久きさくはらうらひはうらてはゆめ  
もはゆめうらひに月やまにん

三十一番

浦雪

大 坊

御製

終くある我名と加筆よ和音の浦乃  
玉藻れ言れあまらうらうら

大

准后

きさくはらうらひはうらてはゆめ  
もはゆめうらひに月やまにん

三十二番

大 坊

崇徳門院

久きさくはらうらひはうらてはゆめ  
もはゆめうらひに月やまにん

言にこ紀山くううれはりの舟

右

義に親王

去うせうとれと去はりぬあれ言乃  
はりの浦れあ言がの言

三十三番

丸拍

入道兼大長女

去ら浪りを紀吹こゆをとなしと  
言けうわくふもはれううを

太

権大納言實永

ゆまにたりみかり松うそれるに

浦るえあうむ言れあう河年

三十四番

丸拍

為定卿女

りのううやうあ木れ松小あ言れ  
はりねるといしうせうし

太

経定卿女

なえうふあはえううのあをねく  
去れうりのううのあう言

三十五番

丸

閑白

あせり風吹くうしれうんまきそり  
智にこきいけつなとれうらふ

大 務

葉大袖きこ敷

まきばる成まのよれうにゆりそへ  
ろき入はりりれ浦れあしゆき

三十七番

大 務

入道前大段大巻

まきうしれうらうら地あまゆいゆき  
あまうられぬあま地しきやあ

大

ゆい宋雅

なりの入うの浦をせぬ成く吹しきそ  
あやしいはりのり雪乃あま介の

三十七番

大

大 巻

十かゆりれ花とみよとや和音の浦の  
松れこす島ふあゆるあしゆき

大 務

内古巻

あまそ見えは程やはりしむたまうし  
あしみのうらの車ものあしゆき

三十八番

大 巻



三十九

右大臣

和歌のうららのみちささるもくは成かひひて  
きよしげそむしつあたらやうらん

太

右近中将之雅

吹風とたもとそをわすれよさのい見え  
しつとせばりか雪のあまがのの雪の  
三十九

太

右近大夫義持

まじつはらじ浦のこまをいりりめれく  
雪のあまがの雪のあまがのの雪の

太

権中納言為平

月影おとちなほくさきとあひま  
ねえのうらむふはさく白雪  
早敷

太

沙弥帯一室

風さびみすそふさするあはれ  
雪とほりりのうらむらり

右

権大納言重光

夕日さすりそのさしあはれとて  
雪とほりりのうらむらり

軍一書

た 傍

た 進ちおの云後

吹くはる回くととあつてはてある雪の  
やうに流るりのうららのねうせ

た

前大納言具言

あつたりの浦あつたつとつとつとみ記のよ  
ありつとむ雪とあつとつとつとん  
四十二書

た 傍

権大納言云宣

浦風うらなみとわらやあつ雪に

こす急そるひくみかろき川原

た

実考知長

木す急よの流りのとあつと松風雲  
あつたおれ浦の雪乃河守つ  
四十三書

た 傍

権大納言實長

よれとるし木乃まれ雪とつとれぬ  
浦のさし川乃雪のあつたの

た

参儀行後

なふはつとあつとつとつとつとつと

すくろふ津のうらら乃白浪  
早定妻

た 持

権大納言忠定

ゆりほり雪うららくはあし  
志ちいらぬう舞のとりこ

右

た 権大納言忠宣

難波人さくやあし大井家あつた  
うららぬぬくあれのちりこ

早定妻

た 持

沙弥清宗

あはれ人乃ちかくしそことけうそ  
袖うら雪ハたつはりの斗

右

魯儀満親

浦あうくるねてちかくむかひち  
雪うらくことらすさけあま

早定妻

た

権大納言通宣

まはれよしの浦うらうらはれ  
雪うらむじふあちち海山

右

為盛納長

浦と成すに志介のむつとど白波れ  
又よするかよと成るる志つとん子  
早七書

た 傷 権大納之次身藤

なをさうをうとれさうの時とやうはさそ  
おととあうとれさうのまうと

た 権中納之経豊

あぬ人れさうとあすのまうとあうさう  
はりれかおれそそこのうさう

早八書

た 権中納之宗氏

う紀う強うあるとはそれと浦ゆら  
はりつとあぬ浪のうさう

た 宗量初長

兼もさうと志のうさうとあうた  
あうと浦ふはりさうとん

早九書

た 傷 少跡常一永

浦とゆくさうとさうとさうとさうと  
さうとさうとさうとさうとさうと

太 沙弥祐信

あきまじう教よまのころるこ回乃く  
習うらちくじあまらりたりた  
あしあ

た 泰後隆貞

乃く海の浦ふぬれまはさゆよ乃  
いそ急流のまろがとくとま

た 権大信初亮君

ち紀乃うは習うらあまらり  
なとまぬあまらりま

あしあ

た 妙法宗傑

なるあはかてはとらりあ  
こふはかく流るま

た 権大信初慶成

あまゆ紀のあまらひあうてり  
松うや子世のあまらり

あしあ

た 基親初長

あまらりあまらりあ

香にるるゆへあきりるしりて

た 傍

後三後備久

あきれたるこそれしうせをたまりて

華のよにけりる香のたよあき

卒三妻

た 傍

雅清

まうまかへあふれみちいしみるしうて

香し故とぬうらうせをぬく

た

為貞

りこの糸は半し清く香てあつ香り

あついにれうと浪たう色く

又十雲妻

た 傍

少弥中鑑

あつ海やほりよほあきりれ袖もくさ

香よそくあつ志望のうらうせ

た

少弥釋念

あつゆきのつもれいしうらうせ乃

とらうとれたる海のみが乃松原

卒の妻

た

小比敷祚宮能都成胤

うらやまのねははる海をくちりて  
雲小なる見れうらやまをねく

太 借 津も西橋

少うはりのみきはの雲成ゆきたて  
浪もせうしーのうらやまを

舟六重

太 借 前大借正乃意

すみうしは浦ゆき月とちばうま  
たまれねはるはるまうらやま

太 借 前大借正慈并

おとつもくしきるゆきるねはる  
おとつもくしきるゆきるねはる

み七七重

太 借 前大借正乃意

ゆりもくしきるゆきるねはる  
又ゆりもくしきるゆきるねはる

太 借 前大借正乃意

おふゆきもくしきるゆきるねはる  
おふゆきもくしきるゆきるねはる

み十八重

たぬ

信正の尋

よきののしるやうに風よとれとてしめて乃  
あつとあつとみねのうら川原

た

公経の長

浦らうららにさるあし福乃とあつとろく  
なりやうとてみねのうら川原  
中十九歳

たぬ

信正の長

まのいふとさうとて思てあつとせと  
ねさるのうらの音のうら川原の

た

豊光の長

あつとあつとあつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつとあつとあつと

たぬ

永田の長

あつとあつとあつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつとあつとあつと

た

堯仁の長

あつとあつとあつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつとあつとあつと



六十二番 神祇

た お

御製

華楽小く乃々豊く一可くちりりかき  
く多の社乃社乃のりーこと

た

唯店

いさば身うさーとあ平終る川時と  
あ又百さーりあーの

六十二番

た お

宗樂門花

書とささじうまよなうりささ

いん代乃子紙かさかき秘く

た

義仁親王

いりー水極くす勝と夜あまー代い  
神とあ聖にゆさまのるん

六十二番

た お

入乃前方政大臣女

かとうあさーあんたよのねれーまの井て  
るあさーいあの子と能のん

た

権大内卿之實永

書とあさささのたさささささ

あられとせしる人神やすしん  
六十四巻

た 務 あるはら女

我よりんうあふく小神とねりし  
ふらせれ友しなやとりのん

た 絶望の女

しす場とねりしとまじしあふた  
りく代魚あふすえしうしん

六十四巻

た 閑白

あふ魚のれもらせあまらみさ  
あふたましし神らもりりけし

た 務 帝天細き乙教

かきし山あ平らねし乃はうし  
神と君とれめくんあふ代ふ

六十四巻

た 今乃あふ政大臣

れとこしちとせのはうとあふ  
ま見うりく見あみちふはうせ

た 務 沙弥常雄

いふ代り神ちけかまらうらにみ  
糸のあられまらうらに  
六十七歳

た 長

へし海りの神ちけかまらうらに  
うらにまらうらに

た 長

そそくしりかまらうらに  
あらしやちしりかまらうらに

六十八歳

た 長

る海りの神ちけかまらうらに  
あらしやちしりかまらうらに

た 長

あらしやちしりかまらうらに  
うらにまらうらに

六十九歳

た 長

あらしやちしりかまらうらに  
うらにまらうらに

七十一 権大納言之為事

松をいふもろくはさうさく成すべし  
神はくはさうさく成すべし  
草叢

七十一 権大納言之為事

やうさく成すべし  
はさうさく成すべし

七十一 権大納言之為事

あつちの神代とさうさく成すべし  
いふはくはさうさく成すべし

七十二

七十二 権大納言之後

はさうさく成すべし  
まはさうさく成すべし

七十二 権大納言之為事

松をいふもろくはさうさく成すべし  
神はくはさうさく成すべし

七十二

七十二 権大納言之為事

いふはくはさうさく成すべし  
まはさうさく成すべし

君うさむいぬま子成り久し

た

實考の長

やとよりいふ事てきとあはし  
あはしなりき世に神ふまうせと  
七年の事

た

権大細の實考

あはきんむらふそのととけし  
かこき神乃りうらえあはふ

た

冬儀の長

あはれそまのりといし

心ころなまむ代と神をせむ

七年の事

た

権大細の忠定

と下りかき成れ居し  
あはれそまのりといし

た

たき房の長

あはれそまのりといし  
あはれそまのりといし

七年の事

た

沙流の長

神の御魂をいさめしむるに  
おのゝちをいさめしむるに

大 権大御之通宣

神とあそみとて我川乃す  
そとせぬとてなほ我川乃す

大 権大御之通宣

代にのちえはゆりくと  
君のあまれかまをいさめしむるに

大 権大御之通宣

ねとゆねをいさめしむるに  
神をいさめしむるに

七十七歳

大 権大御之通宣

あつめいのひらきとて  
さしとていさめしむるに

大 権大御之通宣

やとらうのちをいさめしむるに  
あまのちをいさめしむるに

七十八歳

た 務

権中納言宗氏

いりしあふみのこちまのれのをしせしむる  
まのりしあふみのこちまのれのをしせしむる

た

宗景納言

ちりしあふみのこちまのれのをしせしむる  
あけそとにのこしむるをいふ  
七平の妻

た 務

河内守永

あまらるるいふるははとあふく  
ての日のみそこいふるのむ

た

河内守信

かきくは神ともいふるをいふる  
八百方代りしあふみのれのをいふる  
八十妻

た

河内守信

神ともいふるをいふるをいふる  
いふるをいふるをいふるをいふる

た 務

河内守信

いふるをいふるをいふるをいふる  
いふるをいふるをいふるをいふる

八十二番

た 少休宗傑

きんぐんいふるあそふあそふ  
てしんいふるあそふあそふ

た 権大信教慶成

はきむしなるあそふあそふ  
あそふあそふあそふあそふ

八十二番

た 養 養親朝臣

あそふあそふあそふあそふ  
あそふあそふあそふあそふ

松乃よりいひあそふあそふ

た 後三位緒久

あそふあそふあそふあそふ  
あそふあそふあそふあそふ

八十二番

た 持 雅清

あそふあそふあそふあそふ  
あそふあそふあそふあそふ

た 為貞

あそふあそふあそふあそふ  
あそふあそふあそふあそふ



んうしきせじふあしうしうし  
八十四歳

た 信

妙法中繼

君う代ふふうしうはまじかみちらふ  
瑞慶寺ふまのたうりまて

た

河津釋念

やうしううふ老なれわしちうい塔の  
山とらるるふははぐりゆくまを清

八十六歳

た 信

小比敷祐宣祐教成胤

かちうしうふあふまそいのねはきくさ  
こふ葉うしあふりせのぶうし

た

清忠國清

信うしうしにほうふあふあわれま  
あふまそいのうらうり代ふてゆ

八十六歳

た 信

善吉信正道之

ねまほれふはぐのうしあみくは  
神のまうせそなまのうらう

た

前出信正善年

君も神の神にさしつゝりて  
代りまはさるゝ松の木の根

八十八歳

丸坊

前古僧正の御

いりしあ神のらしむるをれまへり  
あまのあはれとあまのまへり

太

或は神長

風月りあ神のらしむるをれまへり  
天の神

いりしあ神のらしむるをれまへり

八十八歳

たお

僧正の御

いりしあ神のらしむるをれまへり  
あまのあはれとあまのまへり

太

乙種神長

いりしあ神のらしむるをれまへり  
あまのあはれとあまのまへり

八十八歳

たお

僧正の御

いりしあ神のらしむるをれまへり  
あまのあはれとあまのまへり

太皇太后 豊光朝臣

朽しる心まじりのまらせ成ちまら

神のまじりのまらんちけくす米

乃平麦

た緒 永明法親王

口まらる神のまらんちけくす米

なれひまらんちけくす米

太 竟仁法親王

口まらる神のまらんちけくす米

口まらる神のまらんちけくす米

這秋合幼年之時書寫之印歸洛之  
好後或取求如之而有子細以母中進  
献梶井宮者也仍銀夏之由耳矣

慶長九年 甲辰 孟秋中七日

也足軒素然

110x  
646  
8  
6

Handwritten mark or symbol at the top of the page.

Handwritten text in a cursive script, likely Chinese characters.

Handwritten text in a cursive script, likely Chinese characters.

Handwritten text in a cursive script, likely Chinese characters.

Handwritten text in a cursive script, likely Chinese characters.

Handwritten text in a cursive script, likely Chinese characters.

Handwritten text in a cursive script, likely Chinese characters.

Handwritten text in a cursive script, likely Chinese characters.

Handwritten text in a cursive script, likely Chinese characters.

Handwritten text in a cursive script, likely Chinese characters.

